74—259

聖論

高橋五郎著

東京 文榮閣藝版

世界三聖論序

三聖とは何ぞ孔子釋迦基督なり、勿論之を論ずるには種々の方あり、例へば之が人物の高下眞僞の如き、古來衆說、紛々として、人各々その好む所に黨す、我輩は此問題をば僅々二字に解決し了れり、曰く三聖と、既に之を聖と稱す、豈之が優劣を論ずるを要せんや、聖は至極の稱なり、堯舜禹湯の如し、誰か其高下を喋々せんや、又伯夷の如き柳下惠の如し、皆聖人の壘を摩す、孟子は皆之を聖と名く、只其特色を殊にする而已、而して其貴ぶべきは茲に存す、豈衆聖を悉く同一模型に鑄こむべけんや、

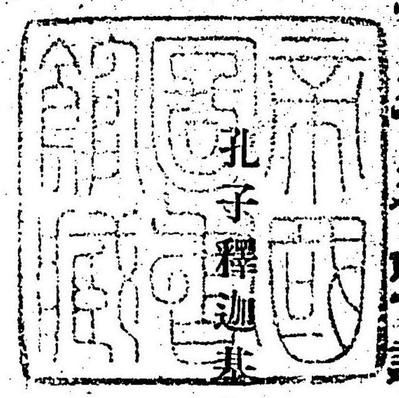
故に我輩は右三聖の德化力に專ら重きを置いて論斷せんとせり、曰く三聖の敎訓いづれか最も世道風敎に裨補

する所多かるべきやと、三聖一人は言へり『爾等果實の善惡を見て其樹の良否を判別せよ』と、乃ち我輩は各箇の主義を人間教、非人間教、神人合一教に辨別し、證斷するに上記の金則を以てせり、其人物を論ぜる如きは之が教理の由來を示すべき前提なる而已、

明治卅六年四月中院

著者識

世界三聖論



督人物評

高橋五郎新著

第一章　三聖の關係

嘗て甚だ盛んにして、一たび大いに睡りたりし、宗教論、復も世間に花を咲かせ來りていと賑はし、已に彼が如き原動あり、又彼が如き反動ありたれば、今よりや蓋し中道に

復する者なるべき歟、兎に角議論は眞面目と成り來れり、研究は益々着實に赴けり、昔の宗教家は機智を以て爭ひ、頓才を以て競へり、一方に孔子をして釋老の前に跪拜せしむる如き三聖畫を描く者あれば、他方には釋老や善く空誕を說けば孔子伏して嗤ふと之に贊する者あり、仁齋佛道を排斥して空而已と爲すや、徂徠は節を擊て曰く、仁齋の言一々妄ならざる者なけれども、獨其佛教を指して空と爲すは妄ならずと謂ふべしと、其語尙耳に在るに、原瑜は又徂徠を譏て曰く、徂徠每に宋儒の說を辨駁して佛氏の所謂偏一切法界と謂へど、彼が自說もまた是れ佛氏の捨身信他攝取不捨說より脫化し來れる者ならざらんやと、甲是乙非紛々擾々の中に儒佛兩教は併し乍ら駸々

と榮え來りぬ、

但し物は新鮮の空氣を通ぜざれば必ず腐敗して虹を生ず、德川氏の末葉に及びてや、儒道は空文となりて復志氣を振作するに力なく、佛道は虛式に流れて徒らに愚夫愚婦の迷信と化し了りぬ、而して道教に至りては、初より我國に勢力を扶植する能はずして止みぬ、然り道教の如きは是れ我が國の人心に入るに最後なる者にして、又我が國の人心を去るに最先なる者と謂ふべし、

是の如く道教は少なくとも我が國に於ては宗教の舞臺より謝し去りしかども、今は其かはりに基督教といふ幾百倍の强敵は入り來りぬ、其西洋諸國を風靡せる餘勢を以て攻こみ來れり、我が國の宗教界に取りては是れ恰も

狼を出して虎を入れたるが如し、

但し宗教界に古來一大混雜を惹起せる厄介物は宗教が相互に他を弟子視せんと試むるに在りとす、是の如く道家者流は乃ち說をなして曰く、禮記には『孔子曰、吾聞諸老聃』といふ文字往々にして見ゆ、司馬遷も又說をなして曰く、『孔子適周、將問禮於老子、老子曰、子所言者其人與骨皆已朽矣、獨其言在耳、且君子得其時則駕、不得其時則蓬累(轉)而行(去也)、吾聞之、良賈深藏若虛、君子盛德容貌若愚、云々、吾所以告子、若是而已、』又孔子は出でゝ其弟子に告て曰はく『鳥は吾其能く飛ぶを知る、魚は吾其能く游ぐを知る、獸は吾其能く走るを知る、走る者は以て網すべく、游ぐ者は以て綸すべく、飛ぶ者は以て矢すべし、龍に至りては吾其風雲に

乘じて天に上るを知る能はず、吾今日老子を見るに、其れ猶龍の如き耶』と、是に由て孔子は老子の弟子なるを知るべけんと、敢て孔子を貶し、儒道を輕視せんと欲す、

但し老聃は孔子よりも年長にして、且周室の圖書館長(守藏室之史或は柱下史)なりければ、周禮に精しかるべきは自然の勢にして、孔夫子が往て之に禮を問はれたるは毫も異しむに足らず、孔子の如きは實に『學を好める』者にして、萬有を悉く師とす、其鳥獸たると草木たるとを擇ばず、況して人類をや、矧や人中の英俊傑士をや、又老子の如きも、史記等には、禮を孔子に敎へずして、唯吾所以告子者、若是而已とハネツケたる樣子には見ゆと雖も、是只經國治世の哲理に關する者にして、周禮を指せるには非ず、周禮

は必ず懇ろに之を教へたるならんこと禮記に屢々吾聞諸老聃てふ五字を書せるに徴しても明瞭なりとす、

勿論老子は超凡絶俗の大哲學者なり、孔子若し果して老子を龍に比したりとせば、流石は孔子の慧眼と感服するの外なき也、老子は眞に地上の龍なりけり、其逆説警句の豪放不羈なる、往々案を擊て快哉と叫ばしめんとす、曰く上士聞道勤而行之、中士聞道若存若亡、下士聞道大笑之、不笑不足以爲道、嗚呼何たる痛快の大斷案ぞや、眞に然り、下士笑はずんば何ぞ以て道と爲るに足らんや、一曰く不出戶知天下、不窺牖見天道、其出彌遠、其知彌少、然り、道は吾が前に在り、否な吾が身に在り、之を遠きに求むるは則ち是古來道を得る者鮮き所以なる哉、一曰く天下之至柔、馳騁

天下之至堅、不言之教、無爲之益、天下希及之矣、亦是れ治國處世の秘訣と謂つべけん歟、眞に强梁者不得其死、一曰く治大國若烹小鮮、嗚呼何等の斬新なる比較ぞよ、小刀細工の凡庸政治家須らく此語を肉碑に銘刻すべし、大邦と小魚兩々較べ來りて何等の好想像ぞよ、一曰く含德之厚比于赤子、毒蟲不螫、猛獸不據、云々、正に是れ基督が赤子を指して天衆に比し給へる精神なりとす、一曰く天下有道却走馬以糞田、天下無道戎馬生於郊、曰く以道佐人主者不以兵强天下、其事好還、師之所處荆棘生焉、大軍之後必有凶年、嗚呼兵の凶器たることを叫べる何者か是よりも深切ならんや、

但し老子はまた往々忌憚なしに、斟酌なしに眞理を道破

したれば、恰もマキヤベリーが政治を談ぜる如く、ラロシフコールが人情を悉せる如く、一見邪說暴論なるが如き者亦散點せざるに非ず、例へば將欲翕之章の如き、古之善爲道章の如き、動もすれば人を誤らんとす、否な已に程朱の徒をしてすらも疑難を此間に挾ましめき、曰く將欲翕之必固與之、曰く古之善爲道者之必固張之、……將欲奪之必固與之、非以明民、將以愚之、其言極めて痛切にして、亦甚だ危殆、固より惟達識明哲の士に之を語る而已、決して是れ小兒に利刃を貸さんとせる者には非ず、朱子は此危言を咎めて曰く、老子極勞攘と、程子は又之を譏て曰く、老子は初め道の玄妙を談ぜんと約し乍ら、遂に横道に蹈ゐりて其言權詐を極めたりと、此等の評語多少當らざるにも非れども、

一又實に秦が黔首(人民)を愚にせんと務めたる如き、說客が頻りに權謀術數を弄べる如き、或は多少老子に淵源したらんと雖も、一固より老子は單に哲學を講ぜる而已に非ず、汎く天下の經濟を論じ、又偏く人事の委曲を悉くさんと試みたれば、之が危言激語の如きは適ま以て其文辭に精妙なるを證すとこそ謂ふべけれ、偖老子は斯の如く一方にては儒教の師と妄稱せられたる如く、他方にては又、其說概して玄妙なればとて、往々佛教家之を佛子の徒となさんとせり、曰く皆是佛說なりと、固より是の如きは皮相の淺見にして取るに足らざる也、要するに、老子は、其說宏大玄幽なるが故に、哲學者にも政治家にも宗教家にも均しく誤解せられたる者とす、彼の黃老の道と稱する道

學の如きは宗教家が之を誤解したる者のみ、彼の晉を亡ぼせりと稱する清談風流宗の如きは哲學者が之を誤解したる者のみ、

次に儒教と佛教との關係を顧みるに、佛者は往々孔子が釋迦の弟子たらんことを冀ひし由を喋々す、即ち佛家は列子を引て曰く、孔子曰丘聞西方有大聖人不治而不亂不言而自信不化而自行蕩々乎民無能名焉思へらく是即ち孔夫子が釋尊の無上菩提道を聞んことを求めたる證左なり、然ればこそ孔子は其剴切なる希望を陳べて曰らく、朝聞道夕死可矣と、宋の丞相張氏の如きは之を評して曰く、以仁義忠信爲道耶、則孔子固有仁義忠信矣、以長生久視爲道耶、則曰夕死可矣、是果求聞何道哉、云々、固より斯の

如きは多少牽强附會の嫌なきに非ずと雖も、孔子が釋迦の名聲を遠く聞き傳へて竊かに欽慕したるは或は事實ならん歟、开は兎まれ角まれ後世の佛徒は孔子をも亦權化の菩薩と說き做して得々たるを見る也、

但し是よりも幾倍强烈なる師弟論は近頃ろ佛教と基督教との間に起れり、蕞爾たる猶太國より興りて基督教が然かく大成功を博したるは、古來世人が驚きて已まざる所なるが故に、之が原因を探求する者甚だ多く、隨て又之が性質を講究する者夥しかり、其中基督教に反對なる講究家輩は或は說をなして曰く所謂る聖書中の迷信は之をバビロニアに得、哲理は之を希臘(ギリシヤ)に得たりと、此說一時は甚だ熾んなりしも、亦反對にプラトの哲學書

は舊約に淵源し、ホーマルの詩歌は詩篇に感起し、デモスセネスの修辭はイザヤ、エレミヤに根柢すとも稱し得べかりければ、遂に交綏の姿となりゆきぬ、寔に夫の大修辭家ロンヂナス(第三世紀の名高き希臘人)の如きも創世記の冒頭に於ける天地創造談を引きて、モーセの筆力を稱讃したり、曰く天帝宣はく(一何を一)光明あれと、輙ち光明ありき、天帝宣はく地あれと、輙ち地ありき、嗚呼是れ何たる崇高深大ぞよ、』

是に於て論者は眼を埃及に轉ぜり、曰く猶太教及び基督教は悉く埃及の古典に基づける者なり、曰く夫の古墳裏より掘出されたる葬祭文集、セ、ブック、オブ、ゼ、デッドは基督教の母なりと、其一例として論者は基督の絶命辭エリ、エリ、

ラマ、サバクタニを提出し、鐵面皮にも主張して曰く、是れ該葬祭文集中に象形文字を以て書かれありし者なるを基督の口に入れたる而已と、而して我が某々新聞紙の如きは得々として此妄說を譯載したりき、文盲も此に臻りて極まれり、エリ、エリ、ラマ、サバクタニとは新約書中に希臘語を以て飜譯せられある如く、全く是れ希百來語にして、而も又アラメークと稱する新希百來語(基督時代に話されし希百來語)に屬する者なることは、博言學者の皆均しく認むる所なるに非ずや、即ちエリは、エル(神)イ(吾が)にて『吾が神』の義、ラマは『何ぞ』の義、サバクタニは『我を棄てたまふ』の義なること、火を見るよりも明らかなれば、此種の暴論も幾んど今は消え失せなんとす、只だ僅かに埃及の狼頭神アヌビス

（神の名）はキリストと同一視せられたり、埃及の驢頭神テフナン（タイフヲン）は基督と同一視せられたりと言ふが如き薄弱の殘壘を保ちをる而已、勿論埃及の基督教徒はアヌビスが死者と天帝との間に介立するを見て基督の仲保に似たりと爲せしならん、然れども是は唯イスパニア人がメキシコの神ケツアルコアトルを基督に比し、スカンヂナビア行の宣教師が北歐の日神バルデルに基督の聖影を認めたるが如くにして、何等の不思議も其中に存する無けん、

是に於て乎論者の煩悶は劇だしく、遂に去て印度に基督教の家郷を看出さんと試ることと成りぬ、是れ佛教臭味の徒が極て喋々する所にして、短見者流皮相論者は今や

頻に之に雷同しつゝある也、曰く一百年前に出たるジエズイト派の海外傳道記中には往々基督教と佛教と百事殆んど仝じき如き觀あるを驚ろける文字あるに、搗て加へて一千八百四十四年には天主教の宣教師レヂス、ホク神父と名くる者西藏國に於る佛教の狀態を描寫せるあり、遂に基督教社會をして大に愕然たらしめ、特に天主教會をして悚然たらしむる事となれり、基督教の敵たる人々は此の不精密なる一編の報告書を宛がら鷹の子の如く珍重して措かず、遂に夫の米人クーラス氏が率ゐる佛教臭味の一團躰ーオーブン、コールト連中ーは近頃之を再刊して、今や其賣弘めに汲々としてある也、ホク曰く、十字架、寶冕、明衣、法衲等凡達賴喇嘛が外出の時に戴着する

所の者、又二重の唱歌班、讃美、印咒、五條の鏈を以て垂れたる香爐、喇嘛が右手を伸て信徒を祝福する禮、獨身生活、出家遯世、古聖禮拜、斷食、行列、祈禱、聖水(阿伽)、一是皆佛教徒と吾輩(天主教徒)との相酷似する所なり』と、此觀察の皮相なるは一目に瞭然たれども、此皮相鹵莽なる記事を宛から神託の如く心得て喋々する佛教臭味の泰西學者こそ殊に憫笑すべき者なれ、先づ彼等は比較宗教學上の一大原則を犯せる者なり、抑も喇嘛教は其名の如く西藏特有の喇嘛教のみ、佛陀教には非ず、譬ば醋化したるビールの如し、其人身を毒する或は非常なる者あらんとす、喇嘛教が佛教中に位ゐするは恰も回々教が基督教の圈内に位するが如き耳、俱に其母たる宗教を汚す大なる今更贅言す

るを要せず、茲に又眼を轉じて他方を見るに、天主教(羅馬教)と稱する者は、勿論基督教派中の最も古き者なれども、一亦是其古きだけ、宛から大海が巨細清濁を甄ばざるが如く、衆過(迷信)は衆美(虔信)と偕に是れに歸したれば、決して純粹なる基督教とは謂ふべからず、少なくとも其儀式表號等に於ては周圍の諸例衆儀を悉く同化し去りたる跡なきに非ず、然るに今論者は彼の腐敗したる佛教(喇嘛教)を以て此の不純粹なる羅馬教に比較して云々せんと欲す、其正鵠を失せるも何ぞ怪しむに足らんや、

論者の批評眼は纔かに膚寸のみ、單に皮相外貌を見る而已、未だ嘗て眼光の紙背に透る者あるを知らず、豈慨歎すべき事ならずとせんや、頃者リリ、オスワルド、ケーラスの

徒最も此種の佛教化事業（耶蘇教を悉く佛教化せんとする企圖）に勉めつゝあるが如し、オスワルドが傳說上の酷似點として揭げ出せる二十一箇條の如き、又教義上の酷似點として擧たる十箇條の如き、俱に此類の皮相觀なれども、亦淺識薄信の徒輩は之が爲に痛く迷はざるにも非ず、之を要するに、傳說上の酷似點とは釋迦八相上の古傳舊說上基督の事蹟に類似せる者多かるを謂ふ也、然るに釋迦氏の此等八相譚は年を逐て次第に增加せられ來し者にして、其確實なるは固より得て知る可らず、耶蘇基督の傳記と孰れが先き孰れが後なる殆んど區別す可らざる多きを奈何せんや、殊に釋迦八相記譚は我輩が從來御伽話にまで語り出したる者にして、人口に膾炙すとも謂ふべかりしと雖も、佛

教徒は却て釋迦八相譚と基督降誕談との間に然か著しき幾多の接觸點あることを感ぜざる也、是其故何ぞや、他なし、是等兩者間には形跡の類似のみ有りて、精神の肖似幾んど見る可らざるが故なりとす、然るを懲ひに雜駁なる釋迦八相談を讀める非基督教家輩、又はアーノルドの『亞細亞の光』（八相記の韻文英譯）を聞かぢれる西洋人等は、大早計にも其皮相の太く相似たるに驚て喧々囂々たらんとす、先づオスワルド一輩の論者は第一番に疑問として提出すらく、釋迦も基督も俱に王家に生る、豈亦奇ならずやと、然り、如何にも奇なり、然れども釋迦牟尼が王子たることは一疑問にして、深く此問題を研究せし梵學者往々之を否定す、曰く首圖駄那（淨飯）は帝王に非ず、又王中の覇にも

非ず、唯富貴の一豪族のみ、然るを佛徒等歳月を經るまに
まに其教祖を追尊するの念愈よ切にして、遂に之を立派
なる王に化し去りたる也と、是れ自然の勢のみ、吾人は寧
ろ其常なるを認めんとす、カーライルは歳月を撮影器の
暗室(カメラ、オブスキュラ)に比せり、何たる好比較ぞよ、寔に歳月の暗室は年を
逐ふて膨脹し來る者とす、但し釋迦が王種若くは王子た
りしとの事何ぞ基督の系圖に影響を及ぼさんや、基督が
ダビデ王の末として興らんことは古代の預言者が夙に
預言したりし所とて、イスラエル(ユデア)の散虔家は皆大
旱の雲霓を望む如く之を待ちをりぬ、此等の預言中以賽(イザヤ)
亞の預言を以て最も著大なる者とす、其詞に曰く、(以賽亞
書第十一章を見よ)

【エッサイの株より一つの芽いでその根より一つの枝はえて實をむすばん
[二]その上にエホバの靈とどまらん、これ智慧聰明の靈謀略才能の靈知識
の靈エホバをおそるゝの靈なり[三]かれはエホバを畏るゝをもて歡樂と
し、また目みるところによりて審判をなさず、耳きくところによりて斷定
をなさず[四]正義をもて貧しき者をさばき、公平をもて國のうち、その卑し
き者のために斷定をなし、その口唇の氣息をもて惡人をころすべし[五]正
義はその腰の帶となり忠信はその身のおびとならん[六]おほかみは小羊
と偕にやどり、豹は小山羊とともにふし犢をじゝ肥たる家畜ともに居りて
ちひさき童子にみちびかれ[七]牝牛と熊とはくひものを同にし、熊の子と
牛の子とともにふし獅はうしのごとく藁をくらひ[八]乳兒は毒蛇のほら
にたはふれ乳ばなれの兒は手をまむしの穴にいれん[九]斯てわが聖山の
いづこにても害ふことなく傷ることなからん、そは水の海をおほへるご
とくエホバを知るの知識地にみつべければなり○[十]その日エッサイの
根たちてもろ〳〵の民の旗となり、もろ〳〵の邦人はこれに服ひきたり

榮光はそのとゞまる所にあらん[十一]その日主はまたふたゝび手をのべてその民ののこれる僅かのものをアッスリヤ、エジプト、パテロス、エテオピア、エラム、シナル、ハマテおよび海のしま〳〵より贖ひたもふべし[十二]エホバは國々の爲に旗をたてゝイスラエルの逐やられたる者をあつめ地の四極よりユダの散失たるものを集へたまはん[十三]またエフライムの猜はうせユダを惱ますものは斷れエフライムはユダをそねまずユダはエフライムを惱ますことなかるべし』

此豫言の當否は姑く措き、兎に角イスラエル人民が救世主の出現を相待ちつゝありしは事實なりければ、歴史を全く無視する者に非ざれば、之を打消すこと能はず、寔にイスラエル人民は初は基督を政治上の救主(即ち羅馬人を驅逐して猶太國の獨立を恢復せん者)と妄信して在りしが、竟に基督が宗教上の救主たることを發見せるや、一

齊に起つて大大反對を試るに至りぬ、此の如く基督の降世は事實中の大事實にてありき、決して疑はしき出來事には非ざりし也、其證據としては内にはジョセファスの大歴史あり、外にはタシタスの好史鑑あり、前者(ジョセファス)は基督より少し後れて生れたる猶太の俊傑たり、又當時の羅馬皇帝に腹心として厚遇せられたる者なり、希臘語を以て猶太國の歴史を著はして最も詳密、其筆眞に椽大、古來天下の大歴史中に算せられ、各國の語に翻譯せられたり、其中基督の存在を證する簡潔明快なる文字あるを奈何せんや、曰く、

『此頃イエスと云ふ者あり、哲人なり(若果して人と稱し得べくんば)、種々の奇蹟を行なへり、心を虚うして悦ん

で眞理を容るゝ如き人々を誨へ、猶太人と異邦人との兩者をして夥しく已れに歸依せしめたり、彼は所謂基督(受膏者、被灌頂者)なりき、我民中なる領袖輩の申告に依て總督ピラト彼を十字架上に磔殺せしかども、初めは彼を欽慕せし輩は彼を棄てざりき、如何となれば彼れ三日めに復活して彼徒に現はれしこと古の先知等が是等の件々並に其他百千の奇事異象を彼につきて豫言しおける如くなりければ也、斯人の稱號(即ちキリスト)に因みて基督教徒と名けらるゝ黨輩は今日に至るまで尚存して斷えず』、

ジョセファスの此文簡なりと雖も、基督の存在を證するに於て明快を極む、但し論者或は此文が後人の挿入ならんかを疑がはんとす、然らば何ぞ去て後者(タシタス)に之を問はざるや、

タシタスはジョセファスと同じくベスパテアン、タイタス、ドミテアンの三帝に仕へたる高名の拉甸歴史家にして、殊に猶太人民には始終敵意を表したりし者なるが、尚も基督の存在だけは明らかに之を證明したりき、即ち其史鑑第十五卷に曰く、

『ニロ帝は已れ躬ら羅馬府に火を放ちたりとの評判あるを打消さん爲に彼の大火災を基督教徒と稱する黨輩の所爲に歸し去り、酷烈に之を處罰せり、基督教徒と云ふ名の張本人はキリストと稱する者にて、總督ポンテナ、ピラト之をタイビーリアス帝の御宇に磔殺せり』、

云々

是れ羅馬歴史家の語にして、聖書中の記事と正に符合す、之をしも疑がはば、天下何物か疑がはれざる者あらんや、日の出没、月の盈虧も亦能く之を疑ふを得ん、されば基督は確かに猶太のベッレヘム村に生れたり、否宮に確かに生れし而已ならず、又ジョセフスが説ける如く豫言の應驗したる者と信ぜられてありき、既に大本に於て然れば、枝葉も亦之に準ぜん而已、例へばキリストの産るゝや、猶太の王ヘロデなる者其位を失んことを恐れ、嬰孩を徧く四方に索め、之を盡く殺して後日の禍根を絶んことを計れりと稱す、傳に曰く釋迦の生るゝや、摩揭陀國王、其國中の住民にして、果して、己が王位を危うくせん

者あるべきやを調査せしめ、釋迦牟尼の産れたるを聞きて之が一族を殄滅せんことを企だてたりと、或は然らんか或は然らざらん、只是れ可能的なる事件なる而已、人類若し果して嫉妬、强き動物ならば、斯の事は少なくとも是れ主觀的に存在したりし者と謂はざる可らず、而して主觀的に存在し得べき事は焉んぞ客觀的にも亦存在せざりしを保すべけんや、要するに此の如きは全く是れ孰れにても可しき事なりとす、

次に十字架に至りても論者往々开が埃及または印度より傳はりし者なることを喋々せんとす、曰く十字架（クロス）は埃及古代の神祇往々之を持てり、曰く印度の佛教にも一種の十字架は用ひられ來りぬと、

按ずるに十字形の徽號ほど作るに易くして然も亦意味深長ならしめ易き者はあらじ、縱横に奔馳するを吾人は『十文字に馳騁す』とも言ふに非ずや、僅々二直線を直角に又は斜めに交叉するや忽ち東西南北を網羅したる圖形と成る也、故に上古より諸國の人民種々に之を用ひたらんも知る可らず、少なくとも上代の埃及人は之を用ひたり、而して其所謂埃及十字架なる者はT形架と稱せられて、全くTの字に酷似す、其直線は横線の上へ貫かざれば、實は十字架には非ず、T字架と名くべき者とす、又印度に行なはれたる所謂十字架は、是亦本當の十字架に非ず、夫の所謂ガマ字架(ガマヂヤン)の類にして四ガマ形より成立てる者なるは一目に瞭然たり、即ち是れ希臘

字母中の第三番に位するガマ字(ㄱ)を四つ組合したる形なりと知るべし、然れば是もまた實は十字架に非ずして鈎字架とも謂つべき者とす、是れ丁字の横桁の右枝を削り、更に之を四箇配合して造れる者卍にして、佛者は梵語にて之を塞縛悉底迦(Svastika)と稱し、支那譯にて之を萬字と號す、是皆人の知る所にして、贅辯を俟たず、佛陀の胸には此字を書して之を萬胸と名く、

論者曰く、佛教の此萬字、是れ基督教に於る十字架の母なりと、余今之に反問して曰ん、然らば埃及の丁字架は如何ん、基督が其中に生れたる猶太人民は久く埃及に客たりし者なれば、丁字架にして若し果して(論者の言の如く)母を要すとせば、埃及の丁字架是れ十字架の本ならずや、然

るに此事は然らず、如何となれば猶太人民が埃及と交通を始めしは基督降世前幾千百年の事に係るに、基督の磔死後までは未だ該國に十字架の使用せられたる者あるを見さりしが故なり、却つて基督教の埃及に弘まれる後、該教徒埃及の神祇に丁字架を有する者あるを見て驚き、且說をなして曰く、舊約書以西結書中第九章四節に說き及ぼせる『額の記號』なる者は或は此の丁字架なりけんか、又此の丁字架は是れ基督の救贖を預表せる者なることは例へば羅馬詩人ヴヰルヂルの田園詩中に吐露せられたる救世主渴望話の類も同日の談ならん耳と、埃及の丁字架にして既に然り、佛教の萬字何の關係をか十字架に有せん、請ふ試みに此等三者の意味を咀嚼し見よ、先づ基督

教の十字架は本來磔死及び救贖を表す、基督十字架上に殺されたれば也、之に反して佛教の萬字は吉祥萬德の圓滿を表し、埃及の丁字架は生命の旺盛を表す、开が根本觀念に於て相異る斯の如くにして、其間殆ど天地の懸隔あらんとす、是に由て之を論ずれば、基督教の十字架を預表せる者は遠く求めずとも、直ちに猶太國の古代に存在せりと謂はざる可らず、他なし、昔し摩西が曠野にて銅蛇を杆上に擧げし者（民數紀略二十一章九、十節、列王紀下十八章四節及び新約翰福音書三章十四、五節を見よ）即ち之が預表たらずんばあらず、

論者或は言ん、然らば基督教徒は只十字架のみを用ゐて、毫も丁字架または鈎字架（萬字形）を用ゐざりしやと、余は之に對へて曰はん、基督教の十字架の形は寔に千態萬狀

なり、殊に歳を經るに隨ひてや其愈よ出で〻愈よ奇なるを見る、試みに十字架史を繙き見よ、實に十字架は宗教的美術の好題目となりぬ、否な、中古には又武士の紋章も用ひらるゝ事となりて、更に其形を多樣に變化するの必要を來せり、其甚だしきに至りては、塔形十字架の如き、菱形十字架の如き、錨形十字架の如き、花形十字架の如き、一見其十字架たるを認め難き者さへ乏しからざらんとす、夫既に斯の如し、其千變萬化し往く間に於てや、勿論丁字架も出で來れり、未字架も出で來りぬ、又十字の縱横線端を少しく鈍解に曲ぐれば半萬字形十字架を生じ、更に之を鋭角に曲ぐるや、茲に純然たる萬字形を生じ來る、誠に是れ易々たる變化のみ、即ち前者は羅馬府に於るドミチ

ァの基督教墓地に發見せられ、後者は羅馬府なるテベル河畔に於るカリスタスの隧墳裏に唯一箇發見せられたり、而して其後者の傍には平和の記號たるP形十字架を添へたる而已ならず、希臘字母の首尾ΑΟ及びΟΑを副書して以て人生の終始を表する例の如し、是れ果して佛教より借りたる者と稱すべき乎、否な、誰か此の如き薄弱の妄斷に甘服せんや、

之に加ふるに、一種の十字架、即ち上に所謂四ガマ形十字架(ガマヂオン)たるや、歐洲諸國に於ける史前の遺物(太古の殘留物)中より往々發掘されて出てたるも事實なれば、既に說ける如く、十字架に類する形象は太古よりして世人が深妙の意味ある者として用ゐ來れる所なるや殆ん

ど一點の疑を容れざらんとす、然るに佛教の萬字スワスチカもまた之を四分するや四箇のガマ形となるが故に、一切のガマ形十字架を悉く亦佛教十字架と名くるは抑も誤解の根本なりとす、然し乍ら佛者も亦自餘の古國民の如く、其萬字を以て衆德圓滿の記號となすに最も適當なる者となせしや爭ふ可らざる也、只天下の人々之を十字架(磔柱)とは初より認めざりし爾、然り、釋迦は磔刑に處せられしに非ず、猶何ぞ磔刑の記號たる十字架を要せんや、之に反して基督は上に說ける如く實際羅馬帝國の普通刑具たる十字架上に釘附せられ槍刺せられて一旦死したれば、基督敎徒が十字架を以て其敎の記號となせるは惟是れ當然の事と謂ふべき而已、而して是また基督の

遺命にも依れる者とす、基督曰く、吾が弟子たらんと欲する者は、十字架を負ふて我に從がへと、是に由て觀きたれば、眞に上代の基督敎徒が信ぜし如く、各國に於ける千差萬別の十字架は悉く元影預表にして、其百方形容せる極秘極密の奧義は皆悉く基督に至りて現實し大成したりと稱ふるも、强ち牽合附會とは謂ふ能はざる者の如し、少なくとも論者の如きは藪を衝て蛇を出す者ならざらんや、

偖斯く十字架にして既に基督敎の特有なること明瞭となりたる以上は、斯の十字架に基づける諸の敎義の如きも亦自然に是れ本來固有なる者と成り了るべし、十字架の種子已に蒔かれたれば、十字架の花を生じ、十字架の實

を結ばんこと惟是れ自然の理なる而已、然るに夫の佛教を以て基督教の母と爲さんと務むる人々は先づ口を啓くや往々佛說唯一神教を喋々す、是最も奇怪なる事とす、婆羅門教（ベダンタ宗等）ならば率知らず、佛教を呼びて唯一神教と爲す如きは、是れ佛教を論ずるの資格なきを明らかにする者に非ずして何ぞや、然れども假りに尙數歩を讓りて渠等の說を聞かんに、其得々として放言する所屢々噴飯にたへざらしむる者あるを見る、曰く佛教に護教の明君阿輸迦王ありて、其治下に三藏の佛典は結集せられたり、故に基督教には該教を以て羅馬帝國の國教と爲せるコンスタンタイン大帝ありて、其御宇にニケア信經は決定せられたりと、吁嗟是れ何の言ぞや、コンスタンタイン帝は果して阿輸迦王の影なりし乎、換言すれば、阿輸迦王は實際に存在し、コンスタンタイン帝は實際に存在せざりし者なる乎、又更に一歩を進めて之を言へば、阿輸迦王の治下に於ける衆僧召集佛典結集は飽までも實事にして、小亞細亞に於けるニケア府の監督會議は全く虛事なりし乎、コンスタンタイン帝（三百〇六年より三百三十七年）が聰明睿智にして能く宇內を統治し、遂に羅馬帝國の首府をコンスタンチノープル（コンスタンチノープルとはコンスタンタイン市の義）に移せし事は日月と同じく炳然として天下の具瞻せし所にして、羅馬史上には十三コンスタンタイン中殊に大帝と稱せられ、三百十三年基督教を公認せしは、ギボンと雖も、ニーブールと雖も、到底打消す能はざりし大大事實なるを奈何せ

んや、是れ決して論者が三寸の舌、一枝の筆を以て抹殺し得べき者に非ざる也、創開數百年の後東西偶然にして護教の帝王を出し、又東西偶然にして其帝王の治下に天下一般に渉れる大宗教會議の召集せられたるは、其實偶然に非ずして最も是れ必然なる出來事にてありき、換言せば、是れ自然中の最も自然なる者なりとす、勢ひ斯の如くならざるを得ざりし者のみ、自餘の件々亦多くは此類なるを知らずや、

論者曰く釋迦の生れたる時天神降りて救世主の生れしことを宣揚せりと傳ふ、基督も亦然り、是れ豈後者が前者を模造したる者なるの明驗にあらずやと、

按ずるに、釋迦牟尼佛の入胎及び出胎に關する俗傳は甚だ新らしくして却て基督の後に在りたる如しと雖も、假に幾歩を讓りて之を殆ど同時に成れりし者とするも、斯の如きは是れ宗教上の眞人または聖人に最も善く適へる傳説にして、其起り得べきは何ぞ獨印度に限らんや、奚ぞ惟猶太に止まらんや、之が類例を政治界に求めんに、マセドニアの王アレキサンデルは漢の高祖と毫も相關せる無かりき、然るに傳者は説て曰く、

アレキサンデル大王の生れんとするや、其母オリンピアスは腹上に雷落ちたりと夢み、夫君フィリプは妻の牀側に神龍の蟠まれるを認めたりと、今之を沛公に徵するに又言ふらく、母媼大澤の陂上に於て夢に神と遇ひ、荐りに雷雨して天地晦冥なりければ、父翁往て見しに、蛟龍の其

上に臨めるを目擊せりと、敢て問ふ、漢の高祖は果してアレキサンデルに摸擬したる者なりや、若くは後者却て前者に倣ひたる者なりしや、斯の如き問は社會的心理を無視したる愚論として、今や一顧も値ひせざる者とす、是れ斯る怪誕は英雄崇拜必然の結果にて、各國幾んど其類例を有せざる者なければ也、

論者又曰く、釋迦は屢々譬喩を以て語れり、諸有智者以譬喩得解と、基督も同樣の語を吐き、また多く譬喩を以て衆を誨へたり、此等二者の間何等かの關係なからざらんやと、

是また前例と同一轍のみ、基督の說ける蕩子の譬喩と大乘妙典中に出たる窮子の譬喩とは、彼此往々相出入する

が如き點々なきに非ず、然れども基督の譬喩は天父の愛の絕大にして、悔改者を愍む慈悲の極めて深きを描ける者に係り、佛書の譬喩（敢て釋迦の譬喩とは言はず、是れ佛滅後幾百年の後に成れる大乘經中の話なれば也）は下根輩が大乘の妙理に悟入し難きことを慈眼愛膓の長者と窮子とを藉りて諭せる者に係り、其精神は根本より相異りて、同じうする所は只其形骸の一部のみ、而して斯く父子の譬喩を以て斯る事件を例證するは殆んど人情の自然に出づ、何ぞ彼此相貸借するを要せんや、今參考の爲め此等兩者を併記すれば左の如し、路加傳福音書第十五章に曰く、

第一節　さて稅吏と罪ある者どもイエスに聽んとて近よりければ　パリサイの

人と學者たち譏誚て曰けるは此人は罪ある人に接りて共に食せり　三イエス此譬を彼等に語て曰けるは　四爾曹のうち誰か一百の羊あらんに若その一を失はゞ九十九を野におき往て其失し羊を獲までは尋ざらん乎　五尋得ば喜て之を己の肩に負家に歸て其友と其隣の人々を召集て曰んわと共に喜べ我うしなへる羊を獲たれば也　七われ爾曹に告ん此の如く一人の罪ある人悔改なば悔改むるに及ざる九十九の義人よりは尚天に於て喜あらん　八また婦のうち誰か金錢十枚をもち其一枚を失はんに燈火を燃て家を掃除し之を獲までは切に尋ざらん乎　九尋得ば其友と其隣の人々を召集て曰ん我と共に喜べ我うしなへる金錢を獲たれば也　十われ爾曹に告ん此の如く一人の罪ある人悔改めなば神の使の前に喜あるべし○　十一また曰けるは或人子二人あり　十二その季子父に曰けるは父よ我得べき財産を我に分予よ父その財産を彼等に分たれば　十三幾日も過ぎざるに季子その財産を盡く集て遠國へ旅行せしが放蕩にして其分資を皆そこにて費せり　十四盡く費しゝとき大なる饑饉その地に在て彼ともしく

爲はじめければ　十五往て其地の一民に身を投たり其人家を牧ために彼を野に遣はせり　十六かれ家の食する所の豆莢をもて己が腹を果さんと欲ふほどなれど何をも彼に予る人なし　十七自ら省悟て曰けるは我父の所には食物あまれる傭人の許多か有に我は飢て死んとす　十八起て我父に往て曰ん父よ我天と爾の前に罪を犯たれば　十九爾の子と稱るに足ざる者なり爾の傭人の一人の如く我を爲たまへと　二十即ち起て我父に往り尚とほく有しに其父かれを見て憫み趨往其頸を抱き接吻しぬ　二一子父に曰けるは父よ我天と爾の前に罪を犯たれば爾の子と稱るに足ざる也　二二父その僕等に曰けるは至も美服を携來りて之に服せ其指に環をはめ其足に履を穿せよ　二三また肥たる犢を牽來りて宰れ我儕食して樂まん　二四是わが子死て復生うしなひて復得たれば也とて彼等と共に樂み始む　二五その兄田に在りしが歸て家に近き樂と舞の音を聞　二六その僕の一人を召て是何事ぞやと問るに　二七僕曰けるは爾の弟歸りたり恙なく彼を得たりしに因て爾が父肥たる犢を宰たるなり　二八兄いかりて入らず是故に其父いでゝ彼に勸

しかば　父に答て曰けるは我多年なんぢに事て未だ爾の命に背ず然ども我友と樂む爲に羔をも予し事なし　然に妓の爲に爾の業を費したる此なんぢが子かへれば之が爲に肥たる犢を宰れり　父かれに曰けるは子よ爾は常に我と共に在また我所有は皆なんぢの屬なり　爾の弟死て復生うしなひて復得たるが故に我儕喜て樂むは當然の事なり

但し左に掲げんとする法華經の譬喩は勿論漢文なれば、茲に再び漢文にて基督の此譬喩を載するを以て最も比較に使なる者とす、

衆稅吏、與罪人、就聽耶穌。哂喇賽人士子譏之、曰、彼乃納罪人共食焉。耶穌設譬曰、爾曹有百羊、而亡其一、孰不姑舍九十九羊於野、而追其亡、至於獲乎。獲則喜肩之以歸。會其友隣曰、亡羊既獲、與我同樂。吾語汝、罪人中有一悔改、則在天喜之亦然其勝於九十九之義人不待悔改者矣。或婦有金錢十、失其一、豈不燃燈掃室、勤求至於獲乎。獲則謂其友隣曰、失金既獲、與我同樂。吾語汝、罪人有一悔改、則在上帝使者前、其喜之亦然。又曰、或有二子、其季子語父曰、請父以所當得之業予我、父遂以產分之。未幾、季子挾貲、遠遊異地、在彼無度、蕩費其業、盡耗一切、其地大饑、困甚。遂投其地一民、遣之於田牧豕、無人餉之。欲以豚所食荳莢、充腹。悔曰、我父若多傭人、其糧有餘、我乃饑而死乎。我將反就父曰、我獲罪於天、及於父前、今而後不堪稱爲爾子、視我如傭人足矣。於是反就父、相去尚遠、父見憫之、趨抱其頸、接吻焉。其子曰、我獲罪於天、及於父前、今而後、不堪稱爲爾子。父命諸僕曰、取美服衣之、施鐶於指、履於足、牽肥犢宰之、我儕食而樂焉。蓋此子、死而復生、失而又得者也。其父與衆共樂。適長子自田歸、將及門、聞樂舞、招一僕問其故。曰、爾弟歸、父以其無恙復得之、故宰肥犢。長子怒、不入、父出勸之。長子曰、我事父有年、未嘗違命、父未嘗以羔賜我、俾得與友同樂。而此子狎妓、盡耗父業、乃至則爲之宰肥犢也。父曰、子常偕我、我所有者皆爲爾有、爾弟死而復生、失而又得、我儕宜喜樂也。

之に對して信解品には大加葉の語として掲出すらく、

我等今日聞佛音教、歡喜踊躍得未曾有、佛說聲聞當得作佛、無上寶聚不求自

得、譬如童子幼稚無識捨父逃逝遠到他土周流諸國五十餘年其父憂念尋求之既疲頓止一城造立舍宅五欲自娛其家巨富××往來者衆豪富如是有大力勢而年朽邁益憂念子夙夜惟念死時將至癡子捨我五十餘年庫藏諸物當如之何其時窮子求索衣食從邑至邑從國至國或有所得或無所得飢餓羸瘦體生瘡癬漸次經歷到父住城傭賃展轉遂至父舍爾時長者於其門內施大寶帳處師子座眷屬圍繞諸人侍衛或有計算金銀寶物出納財產注記券疏窮子見父豪貴尊嚴謂是國王若國王等驚怖自怪何故至此竊自念言我若久住或見逼迫强驅使作思惟是已馳走而去借問貧里欲往傭作長者是時在師子座遙見其子默而識之即命使者追捉將來窮子驚喚迷悶倒地謂是人執我必當見殺何用衣食使我至此長者知子愚癡狹劣不信吾言不信是父即以方便更遣餘人眇目矮陋無威德者曰汝可語之云當相雇除諸糞穢倍與汝價窮子聞之歡喜隨來爲除糞穢淨諸房舍長者於牖常見其子念子愚劣樂爲鄙事於是長者着弊垢衣執除糞器往到子所方便附近語令勤作既益汝價並塗足油飲食充足薦席厚暖如是苦言汝當勤作又以軟語若如我子長者有智漸令入

出經廿年執作家事示其金銀眞珠玻璃諸物出入皆使與知猶處門外止宿草庵自念貧事我無此物父知子心漸已曠大欲與財物即聚親族國王大臣刹利居士於此大衆中說是我子捨我他行經五十年自見子來已二十年昔於某城而失此子周行求索遂來至此凡我所有舍宅人民悉以附之恣其所用子念昔貧志意下劣今於父所大獲珍寶及舍宅一切財物甚大歡喜得未曾有佛亦如是知我樂小未曾說言汝等作佛云々云々

此如く此等二者根本に於て相異なれり、何ぞ其皮相の似たるを喋々すべけんや、若其偶合を一々に貸借の例證となさば、夫の有名なる基督の語、「窄き門より入れよ、沈淪に至る路は廣く、其門は大なり、此より入る者多し、生命に至る路は窄く、其門は小さし、其路を得る者少なし」當進窄門、引而之死、其門也濶、其路也寬、入之者多、引而之生、其門也窄、其路也狹、得之者少」一の如きも、亦佛子の所謂「復更思

惟、此家唯有一門、而復狹小、諸子幼稚未有所識、戀着戲處、』(一門は大乘の妙門を指す)ーと思想貨借の關係ありと稱すべけん乎、斯の如く論じ以て行かば、天下の思想は皆悉く借物と成り了るべし、而して貸したる者は竟に尋ね得られざるべし、若し斯の如き狹隘の見を以て行かば、基督が『己れの爲られんと欲する事を人に爲よ(自分が爲して貰ひ度い事を人に爲よ)』と誨へたる如きも、亦是れ孔子の所謂『己れの欲せざる所を人に施こす勿れ』より剽竊したる者と斷言するに至らん、天下是より甚だしき暴論あらんや、

但し斯の如き妄斷臆計を一々に辯駁するは、癡人の夢を逐次に講究すると何ぞ擇ばんや、因て最後に其最新なる者一則を擧げて之が終結となさんと欲す、开は他なし、聖

ジョサファットと稱する印度出身の基督信者是なり、第七八世紀の交ダマスコ府の聖約翰が著作として一編の希臘韻文世に出て、題してバーラーム及ジョサファット(Barlaam & Josaphat)と曰ふ、是即ちバーラームと名くる基督宣教師(隱遯者)が印度の王子ジョサファットと呼ばるゝ者を教化して信心堅固勇猛精進なる基督教徒と成らしめたる顚末を記せる者にして、夙に之が拉甸譯は歐洲の中古に喧傳し、爾來西洋各國の語に翻譯せられ、一千六百零八年には又イスパニア語に譯出せられしかば、其結果として一千七百十二年には腓律賓語にさへ翻譯せられ、麻尼刺にて刊行せられたるぞ旺んなる、此希臘詩の原文一千八百三十二年巴里に出版せられて以來、十九世紀に於け

る宗教界の一つの呼物とは成りぬ、伊大利亞には『ストリア、デ、サン、バーラーム』と題して其譯文早くより行はれたればか、殊にチーブルズ國の一島パレルモには『サン、ジョサファット教會堂』と稱する者ありて、年少なる印度の一王子が十字架を瞻仰諦觀しをる立像を安置す、實に一千七百五十年の彫製に係る者なること臺座の文字に明らかなり、其然る所以は一千五百九十年の頃羅馬法皇セキスタス第五世之を聖徒の列に加へて、十一月の二十七日を之が命日と定めたるに因る者とす、

今其所載の記事(所謂內容)を按ずるに、是れ福音書中の譬喩と釋迦八相記中の美談とを混和し、更に之を潤飾するに印度固有の教訓話(犀に追はれたる人の話の如き)を以てしたる者と謂ふべし、勿論多少基督教化し西洋化したりと雖ども、上記の根據は之を看取するに難からざる也、故に從來之を稱して傳奇小說の類と爲す者多かりき、然れども他方には又此王子の骸骨と云ふ者發見せられて、今アントウエルプに寶物として藏せらる、

以上は此希臘詩及び此ジョサファットの畧史なるが、近頃論者は之を擔ぎ出して、百方基督教を貶毀せんと試む、其甚々する所を見るに曰く、是亦基督教が佛教に借りたる所多き明證なりと、

余輩を以て之を視れば、此叙事詩若くは傳奇小說の如きは、孰れにしても、是惟基督教の勢力が天下を風靡するを示さんとて、其一例を遼遠の印度に取れる者にして、事實

とすれば猶更の事、假作としても決して基督教の德を傷くるに足らずと思はる、否な、若し之を小說とせば、作者が早くも已に印度の事蹟までも推究めて之を我が藥籠中の物となしたる、アーノルド氏の『亞細亞の光』よりも一千二百餘年前に同樣の釋迦八相記を歐洲に紹介したる一其博大の天才を稱讃せずんば有る可らず、又羅馬法皇が之を聖徒に列したる如きも、輕卒と言はば言へ、若しジョサファット果して釋迦なりしとせば、却つて是れ天下の聖賢を追尊せる美擧と謂ふべき者には非ざる乎、佛敎に於ても老子や孔子を菩薩に列したるに非ずや、要するに渠等は他を攻擊するに急にして、自家の足下を看得ざる者のみ、之を目論とす、

但しジョサファットは必ずしも釋迦なりしとは斷言すべからず、釋迦八相譚は印度在來の美談を悉く一身に聚めたる者とす、固より皆事實なるには非ず、然れば此の印度出身の基督敎徒ジョサファットも、其印度出身なるが故に、又是れ印度在來の美談として釋迦の一身に附着せる幾多の好聞を其一身に牽合したる者ならんも得て知る可らず、否な是れ尤も眞に近き臆說と謂ふべし、若し彼を實地の人なりしとせば、其之を王子と稱するは恰も釋迦を王子と稱するが如く、共に誇張の語なるべく、又ジョサファットは希百來語（天帝審判し給ふ之義）なれば、或は其洗禮名なるべく或は其改名なるべきこと、恰も我國に昔し大澤ペテロ、鹿野ヤコブ抔いふ實際の殉敎者（德川氏に焚殺されし者）ありしが如く、又

明治の代にも澤村保羅、佐藤顯理等あるが如けん、論者の如くジョサファットはボデサット變改したる者なりと說くは牽强附會の甚だしき者とす、殊にボデサットは菩提薩埵にして即ち菩薩なれば、其附會の愈よ拙劣なるを見んジョサファットは前に說ける如く純乎たる希百來語なるを知らざる僻論のみ、

斯の如く余輩は彼等論者が先入の僻見已に痼疾宿痾となりて到底醫度す可らざるを見る也、何等の遺憾ぞよ、彼等の目には胡瓜も蕃瓜も悉く幽靈と見ゆる也、笑止千萬なる哉、

斯の如く論じ來り論じ去るや、儒教佛教及び基督教の三箇各々別物にして、基督釋迦及び孔子の三人銘々獨立なることは昭々として日を見るが如し、各々獨自の眞面目を有す、是等三聖天下を教化する人物として果して如何なる特長を有する乎、其各箇の運命は何如ん、請ふ章を改めて嘗試に之を論ぜん、

第二章　三聖の特色

西諺に曰く、才を識るは才を要すと、果して然らば、聖賢を知るにも亦聖賢を要すと謂はざる可からず、勿論才は善く才を識るが故に、啻に其强點を知るのみに非ず、併せて、又其弱點を知る也、既に其强點弱點を審かにするが故に亦往々兩雄並立たずとて互に相排斥す、例へば楊墨の孔子を非難せる、孟子の楊墨を排闢せる如き、其最も著明な

る者とす、

按ずるに、墨子は聖賢の類にして又哲學者を兼たる者なり、其三法(三表)を立てて事理を論ずる所、縱や未だソクラテスやプラトの論析法(ダイアレクチクス)には遠く及ばずとも、論理の稍緒に就ける者たるは爭ふべからず、亦是れ一種の論法なり、ロヂク也、自ら之を恃むや厚くして主張すらく、事理を明辨せんとするには奈何すべきや、曰く『言必立儀(法也)、言而毋儀、譬猶運鈞(轉動無定者)之上而立朝夕(測晷也)者也、是非利害之辨不可得而明知也、故言必有三表、曰有本之者、有原之者、有用之者、云々、』斯厚葬の害を痛擊して三年の喪の代りに三月の喪を唱へたる如き、天命論(有命論宿命論)を極力排斥したる如き、皆是れ當時に於て儒道の

弊風を矯正せんと試みし眞面目の大議論とす、固より禹が甚雨に沐し、疾風に櫛りし勞苦を尊崇するの餘り、身躬ら短褐を着、藿羹を食ひ、自苦非樂を以て主義とせる如きは、多少清教徒めける矯激に奔れる者なりと雖も、亦思へば勤儉は驕奢に勝る萬々なるが故に、却つて『過の功名』たる觀なきに非ず、況んや其天命論を辯駁するに於てをや、墨子は敢て直接に孔子を非議せしには非ざれども、當時に於る儒教の弊は痛く之を攻擊して曰く、

『儒の道にして天下を喪ふに足る者四つあり、(一)儒家は天を以て不明となし、神を以て不靈となす、是れ以て天下を喪ふに足る、(二)儒家は厚葬久喪を以て人生の最大要務と爲す、是れ以て天下を喪ふに足る、(三)儒家は絃歌

皷舞して聲樂を習爲す、是れ以て天下を喪ふに足る、(四)

儒家は天命を信じて只退居し、貧富壽夭極まりありて損益す可らずと爲す、是れ以て天下を喪ふに足る』、

墨子は孔子と時を隔つること遠からざりし者にして極力儒弊を攻擊せるを見れば、當時の儒風の何如なる者なりしかを想見するに足る、實に墨子の非命論の如きは儒者の此弊風に向ひて作りたる者にして、又此の特殊なる儒弊は論語に所謂『死生有命、富貴在天』より釀生し來れる者とす、又墨子の所謂第一弊政(以天爲不明云々)は畢竟孔子が怪力亂神を語らずして、偶ま子路の如く『鬼神に事ふるの道を問ふ者あれば、『未能事人焉能事鬼(神)』と問者の口を杜塞したるに淵源す、勿論孔子の精神には戻りながら

も、俗儒の弊竇は全く斯の如くにてありし也、儒家は又殊に孔子の本意に背きて奢侈の風を馴致したり、厚葬の如きも亦其一結果と謂はざる可らず、宜なる哉墨子の之を痛刺せること、又夫の第三弊たる歌樂の如きも之に聯關せる者と信ぜらる、按ずるに所謂弦歌鼓舞習爲聲樂、此足以喪天下とは既に禮樂の餘弊として孔子の時代より其端緒を發し居りつ、孔子も親から之に注目せられたり、請ふ陽貨篇を讀んで稽へ見よ、

子之武城聞絃歌之聲、夫子莞爾而笑曰、割雞焉用牛刀、
子游對曰、昔者偃也聞諸夫子、曰、君子學道則愛人、小人學道則易使也、
子曰、二三子、偃之言是也、前言戲之耳、

是れ禮樂を以て民を化すと云ふ聖訓を濫用せし者なるは孔子も已に之を認められたる證據にあらずして何ぞや、武城の如き一小邑すらも到る處に絃聲歌音涌きて起り、男女雜遝起つて相舞ふが如きは、一種の盆踊めける者にして、決して是れ風俗の改良を來たすべき具にあらず、寧ろ却て誨淫導慾の器たらん耳、然のみならず音樂其物に至りても亦、孔子が『鄭聲の雅樂を亂る』を惡みたるにも拘はらず、支那日本の樂器の歷史が證明する如く、之が爲に愈よ急速の步趨を以て鄙俚淫猥なる者と成り來りぬ、但し孔子の之を笑ひたまふや、子游は乃ち眞正面より孔子の常訓を楯にとり來りて反問したれば、固より原則には忤はざる事とて、孔子も子游の言是なりと明言し、前言

は戲れたる而已と說き去られたり、若し子游をして支那の加葉とも稱すべき曾參ならしめば、必らず言外に頓悟する所ありしならんを、單に文學にのみ長じたる子游（先進第十一篇曰文學子游子夏）の事なりければ、竟に孔子の微意を曉らずして過ぎしこそ遺憾なれ、

墨子は孔子の如く治國平天下を心とせしと同時に、又經濟及び兵術に意を注ぎし哲學者なれども、猶孔子の道を以て天下を喪ふに足るべき者となせる斯の如くなるが、更に懸隔せる遠き隱者逸人の流、黃老一派の輩に至りては、其孔子を詆れる、儒道を貶せる、幾層甚だしき者ありき、其中勿論莊子を以て巨擘とす、

但し隱逸自適を以て高標せる輩が往々孔子を刺れる趣

は既に論語にも見えたれば、全くは無根の事に非ること明かなり、例へば、楚の狂士接輿鳳兮鳳兮の歌を歌ひて孔子の門を過ぐと莊子に詳說するあれば、論語の陽貨篇にも亦其異說別傳を揭げたるが如し、勿論接輿は孔子が國道なきに隱るゝ能はざるを譏れる者なるが、孔子とても全く接輿等の精神を否認せるには非るが如し、請ふ試みに家語に載たる父を見よ、子路嘗つて老子の句、被褐(布衣)懷玉を引きて其如何を尋ねたるに、孔子は乃ち之に答へて曰く、國無道、隱之可也、國有道則衮冕而執玉と、是れ見隱須らく時あるべきを說きつ、即ち老子の意を贊せし者に非ずして何ぞや、國有道則見、國無道則隱は賢者の行として孔子も之を稱讃せしに非ずや、

按ずるに論語には接輿の一件を簡短に左の如く記載せり、楚狂接輿歌而過孔子、曰、鳳兮鳳兮何德之衰、往者不可諫、來者猶可追、已而已而、今之從政者殆而、孔子下、欲與之言、趨而辟之、不得與之言、然るに莊子には斯く長々と書して曰く、孔子適楚、楚狂接輿遊其門、曰、鳳兮鳳兮何如德之衰也、來世不可待、往世不可追也、天下有道聖人成(功)焉、天下無道聖人生焉、(全其生而已)方今之時僅免刑焉、福輕乎羽、莫之知載、禍重乎地、莫之知避、已乎已乎、臨人以德、殆乎殆乎、畫地而趨、迷陽迷陽、無傷吾行、吾行郤曲、無傷吾足、山木自寇也、膏火自煎也、桂可食故伐之、漆可用故割之云々

今此等の兩文を比較するに、論語に載せたるは餘りに簡短なれば、拔萃要畧の觀なきに非ず、或は莊子の傳を以て

正しとすべき歟、論者往々莊子を以て徹頭徹尾寓言となせども、是れ實は決して然るに非ず、却つて其過半は根據ある話頭なりと謂はざる可らず、否な此處に於ては莊子却つて孔子が接輿と言はんと欲せし由を記し漏しぬ、必ずしも蛇足を添るが莊子の本領には非ず、

之を要するに、後世の儒者輩が喋々する如く孔子は當時の活哲學者を排斥せざりし者とす、否な却つて孔子は之が名論卓說(若し有らば)を聽聞せんことを冀ひし者の如し、孔子に常師なくして萬物萬人凡て敎ふべき一德一技ある者は皆孔子の師たりし事は子貢已に衞の公孫朝に對へて明言せし所とす、云く仲尼焉學、子貢曰く、文武之道未墜於地、在人、賢者識其大者、不賢者識其小者、莫不有文武

之道焉、夫子焉不學、而亦何常師之有と、先づ孔子は周に往きて禮を老聃に問ひ、樂を萇弘に習ひたりと稱す、其周に往んと欲するや、吾聞、老聃博古知今、通禮樂之原、明道德之歸、則吾師也、今將往矣と言ひ、魯公より車一乘馬二匹豎子侍御を賜はりて出發せり、是れ孔氏一家の記錄たる家語に特記せる所にして、如何にも眞實らしく思はる、斯くて孔子は周に於て郊社の所を歷觀し、明堂の則を考究し、廟朝の度を査察し了るや、喟然として歎美して曰く、吾今周公の聖なりしと、周室の王たりし所以とを詳かにすと、單に然のみならず、周を去るに臨みてや老子は之を送りに餞して曰く、吾聞、富貴者送人以財、仁者送人以言、吾雖不能富貴而竊仁者之號、請送子以言乎、云々と、切に衒鬻の害、

韜晦の利を諭せり、然れども勿論是只老子の半面を描ける者のみ、是惟禮樂の師として老子を寫せる者に止まれり、孔子も老子を評して明道德之歸と言ひたるに、茲にては事只禮樂に關す、有名なる老子の所謂『道德』は固より之を儒書中に求むべからず、老聃の『道德論』は夫の道德經を始として莊子等の道家の書に之を研究するを、要す、然らば老子は禮樂外に何如なる事を孔子に說きたる乎、其形骸たる措辭の如何んは固より知るを得ざれども、其精神たる哲理は之を想像するに難からず、即ち老子は『道德經』の本旨を簡潔明快に講說したるや疑を容れざる也、然れば莊子に揭げたる老孔問對の如きは多少根據ある者と見ずんば有るべからず、曰く、

孔子、謂老聃曰、丘治詩書禮樂易春秋六經以爲久矣、孰知其故矣、以干者七十二君、論先王之道而明周召之迹、一君無所鉤用、甚矣夫人之難說也、道之難明邪、

老子曰、幸矣子之不遇治世之君（遇上古聖人恐笑汝之愚）也、夫六經先王之陳迹也、豈其所以迹哉、今子之所言猶迹也、夫迹履之所出、而迹豈履哉、（家語に曰く、孔子見老聃而問曰、甚矣道之於今難行也、云々老子曰、夫說者流於辯、聽者亂於辭と、以すべし）

孔子見老聃而語仁義、老聃曰、夫播糠眯目則天地四方易位矣、蚊虻咬膚則通宵不寢矣、夫仁義慘然逆吾心、亂莫大焉、吾子使天下無失其朴、吾子亦放風（化順）而動、執德而立矣、又奚傑然若負大鼓而求亡子耶、夫鵠不日浴而白、烏不日黔而黑、黑白之朴不足以爲辯（費辯論之辭）名譽之觀不足以爲

廣泉涸魚相與處於陸相呴以濕相濡以沫不若相忘于江湖

老聃曰吾遊心於物之初孔子曰何謂邪曰心困焉而不能知口辟焉而不能言嘗試爲汝議乎其將(近似)夫至陰肅々至陽赫々××××消息滿虛一晦一明日改月化日有所爲而莫見其功生有所乎萌死有所乎歸始終相反乎無端而莫知乎其所窮非是孰爲之宗夫得是至美至樂也得至實而遊乎至樂謂之至人

孔子見老聃歸三日不談弟子問曰夫子見老聃亦將何規諫乎孔子曰吾乃今見龍龍合而成體散而成章乘乎雲氣而養乎陰陽予口張而不能合予又何規諫老聃哉

殊に此の最後の一段の如きは本書の第一章に引きし司

馬遷の孔老會見談と同傳異記なる者なるや一目に瞭然たり是故に儒家從來頻りに老莊を異端邪說として排闢したるにも拘はらず儒教の元祖たる孔子は却つて大に黃老の道を參酌折衷したる者とす(老子の書を一に黃帝の書と稱す)故を以て五經の一たる禮記の如きも徒に老聃に聞く老聃に聞く(丘也聞諸老聃)と反覆したる者ある而已ならず又實に老子の道の精神を載たる文字往々にして散見す例へば夫の周廟に於ける金人の背銘の如し其中には老子の書又は周書に見えたる文字或は思想散見して畢竟不言の化無我の治を誨へたる者なるが孔子は既讀斯文也顧謂弟子曰小子識之此言實而中情而信行身如此豈以口過患哉又夫の「大同」の如き是れ黃老の要道に非ずして何ぞや

（禮記及家語、孔子曰語未及見而有古記舊誌）曰く大道之行也天下爲公、選賢與能、講信修睦、故人不獨親其親、不獨子其子、使老有所終、使壯有所用、云々、按ずるに是また兼愛の精神なりとす、孟子以下儒家往々墨子の「兼愛說」を辨駁したれども、兼愛は博愛、博愛は汎愛にして、汎愛は之を仁と曰へば、孔子の仁と墨子の兼愛とは異稱同質なること決して疑ふべきにあらず、故に徂徠も墨子所爲、兼愛、大殊於宋儒所指斥也と明言せり、但し仁は人道（ヒウマニテー）の謂にして、（孔子曰仁者人也）固より孔子の發明に非ざれども、兼愛は墨子が博愛を言あらはさんと欲して造り出せる文字たるらしくして、莊子の如きも、實に之を博愛の義に用ゐたり、惟れ儒者は兼愛と云ふ文字の新奇なるを忌みたれども、實は是れ今日の所謂

博愛主義に暗合する尤も著しと謂はざる可らず、基督教は博愛を主義とするが故に墨子を剽襲したる者のみと論ずる者支那人中に往々現はるゝを見ても其然るは知らるべけん、

之を要するに、孔子は博く學んで倦ざりし者なり、豈惟老聃に學びし而已ならんや、魯國に兀者（被刖者）王駘と云ふ者ありて、不言之教を其門徒に授け、弟子の數萬を以て算ふ、孔子の弟子常季其何人なるを孔子に問ふ、孔子曰く、夫子（彼人）聖人也、丘直後而未往耳、丘將以爲師、而況不若丘者乎、奚惟魯國丘將引天下而與從之と、是れ固より莊子の誇張を加味したる者ならんも、家語に至りては其載る所豈過大の言ならんや、然るに言ふあり、§孔子は子華子に途に

遭ふや、恰も百千歳の知己の如く終日蓋を傾けて相語れりと、否な孔子は一切を師とせり、琴を師襄子に學びたるが如きは專門の藝なれば姑らく別物とせんも、又泰山に遊びて老貧士榮啓期が鹿裘索帶琴を皷して歌ふを見るや、乃ち就て其樂む所以を問ひ、又衛に往きて衛の一匹夫に送葬の模範を學べる如き、皆孔が學に常師なかりしを證明すと謂ふべし、

§孔子之剡、遭程子於塗(途也)、傾蓋而語、終日甚相親、顧謂子路曰、取束帛以贈先生、＊＊＊＊＊詩不言乎、有美一人、清揚婉兮、邂逅相遇、適我願兮、孔子問(榮啓期)曰、先生所以爲樂者何也、啓期對曰、吾樂甚多、而其至者三、得爲人是一樂也、得爲男是二樂也、得長壽(九十五歳)是三樂也、貧者士之常、死者人之終、處常得終、當何憂哉、孔子曰、善哉能自寬者也、

孔子在衛、衛之人有送葬者、孔子觀之曰、善哉爲喪乎、足以爲法也、＊＊＊＊其往也如慕、其返也如疑、＊＊＊＊此情之至者也、小子識之、我未之能也、

抑も孔子は斯の如く萬人に萬物に萬事に學び來れり、斯く學びて倦まざりしが故に殆ど集めて大成したり、是れ正に聖賢の聖賢たる所、英傑の英傑たる所とす、圓滿なる英雄又は聖人とは實は其時代の衆美諸善を一身に吸收したる者を謂ふ、己が五尺の小身中に籠城し、己が方寸裏に閉居する者にして豈圓滿なるを得んや、斷じて能はず、孔子は斯の如く徧く四方八方に學べり、故に其智德完全具足して、眞に天下の模範と成るに足れり、既に斯の如く

なるが故に、萬人萬物萬事は悉く孔子を己の弟子と稱し得れども、其孰れの一人も、孰れの一物も、孰れの一事も、孰れの一子を己れの弟子とは言ふ能はず、斯の如くにして始めて知德圓滿の人と稱すべし、是を以て當時の知識界に於ては、孔子の知識は至れり盡せり、否な孔子は又多能多藝にてもありき、「丘は少うして貧しかりし故に斯く鄙事に多能なり」と自ら謙遜せり、勿論孔子は怪力亂神を多く語らざりしと雖も、其博物多識なるや時に或は周圍の人々をして瞠若たらしめたり、夫の萍實の如き羶羊の如き、巨骨の如き、楛矢の如き、孰か是にあらざらん、

傳へ曰ふ、楚の昭王江を渡れる時江中に物ありて、其大さ斗の如く、圓くして赤かりき、群臣一人として其何たるを

識れる者なかりしかば、使者を魯に遣はして孔子に問はしめしに、孔子乃ち之に答へて曰く、此れ所謂萍實なり、剖いて食ふべし、吉祥なり、唯覇者能く之を獲と、使者返り奏し、楚王遂に之を食ふに甚だ美かりき、後ち魯の大夫問て曰く、夫子如何にして此物を知りたまひしやと、

孔子曰く吾嚮に鄭に往くとて陳國の野を通過せし時、童謠を耳にせしが、其辭に云らく、楚王渡江得萍實、大如斗、赤如日、剖而食之、甜如蜜、此の童謠(豫言)應驗す、吾が之を知る所以なりと、

孔子陳國に適きてありし時隼ありて陳侯の庭に落ちて死せしが、楛矢之を貫きて、其石鏃長さ尺有咫、其何處より來りしやを知らず、陳の惠公人をして其隼を持ちて孔子

に問しめしに、孔子答て曰く、隼の來れる遠し、是れ肅愼氏の矢なり、昔し武王商に克ちて道を九夷百蠻に通じ、各國をして各其方物を貢せしめしかば、肅愼氏は楛矢を貢せしに、其石鏃長さ一尺咫ありき、先王其令德の遠物を致すを昭かにせんと欲して後人に永鑑を示す斯の如しと、

吳王夫差が會稽山に獲たりと稱する專一車の（車一バイの）巨骨に關する孔子の說明の如きも亦其博古の學植を窺ふに足る、否な、孔子の其博識なる、時に或は神怪を語るをさへも辭せざりし者の如し、魯語に曰く、

季桓子穿井、獲如土缶、其中有羊焉、使使問於孔子、曰、吾穿井於費、而於井中得一狗、何也、孔子曰、丘之所聞者羊也、丘聞之、木石之怪夔蝄蜽、水之怪龍罔象、土之怪墳羊也、

是の如き例は實に枚擧するに暇あらざらんとす、孔子が知識を求むるに銳意し、殊に所謂政本人幹たる禮を學ぶに汲々たりし事は非常なる者にして、眞に常師なかりしは、啻に庶士に就て敎を請ひし而已ならず、時に或は諸侯に見えて業を受けしに徵して著るしとす、左氏傳にも其事を特記して一の美談となせり、昭公十七年剡國の君主子爵某來朝せしかば、魯公之に宴を賜ひ、因て剡子の祖先たる少昊氏が鳥を以て官に名けし所以を問はしめけるに、子爵對へて曰く、

吾祖也、我知之、（左氏の文は長けれども以下家語に據る）昔黃帝以雲紀官、故爲雲師而雲名、炎帝以火、共工以水、太昊以龍、其義一也、我高祖少昊勢之立也、鳳鳥適至、是以紀之於鳥、故爲鳥師而鳥名、

自顓頊氏以來不能紀遠（不能致龍鳳等遠瑞於己）乃紀於近（取于卑近）爲民師、而命以民事（以民事名官）、則不能故也、孔子聞之、遂見於剡子而學焉、既而告人曰、吾聞之、天子失官、學在四夷、猶信、

既に斯の如くなれば、孔子は決して腐儒者輩の喋々する如き窮屈なる人物にては非ざりし也、却つて其餘りに問を好める所よりして往々無禮の待遇を受けたらんと思はる、勿論寓言假作なるべけれど、漁父と孔子との問答の如きは其一斑を見るべき者とす、漁父乃ち子貢と子路との面前に孔子を評して、仁則仁矣、恐不免苦心勞形以危其眞、嗚呼遠哉其離於道也と曰ひて、將に澤畔に其船に棹し去らんとしければ、孔子走り往きて之を止めて問らく、曩者先生有緒言而去、丘不肖未知所謂、竊待於下風、幸聞咳唾之音云々、漁父の曰く、嘻甚矣子之好學也と、以て孔子が誰になりとも、學ばるゝだけの人に學ばんとするの切なるを太甚しとせり、且又孔子の學問は綿密周到を極めたる者なりき、啻に廣かりし而已、ならず、又深かりき、請ふ彼の學詩一則を拉へ來りて之が一斑を見よかし、孔子乃はち門弟子を催がして曰く、

小子何莫學夫詩、詩可以興、可以觀、可以群、可以怨、邇之事父、遠之事君、多識鳥獸草木之名、

又其子伯魚に告て曰く、

汝學周南召南矣乎、人而不學周南召南、其猶面牆而立也與、

否な、孔子は子息鯉が庭を過るを呼とめて、既に詩を學び

たりやと問ひ、若し詩を學ばずんば物言べからずとさへも戒しめ給ひき、

斯の如く孔子は一詩を誦するにも極めて多方多角的に學びたる者にして、時に或は咨嗟詠歎これを久うせり、例へば蹋天蹐地の詩を誦して悚然たりしが如き是なり、三人行必有吾師焉、擇其善者而從之、其不善者而改之とは實に孔子自身の語にてありき、

此の如く孔子は篤學にして、又一舉一動毫しも輕忽にせざりしと雖も、墨者との關係につきて既に一言せし如く、世人には多く誤解せられてありしと見ゆ、又中には世俗の偏見に乘じて自らも誤解せる如く裝へるも有りき、例へば晏平仲の如き是なり、孔子は却て晏子を讃稱したれ

ども、晏子は公然と王の前に孔子を譏れり、孔子の齊に適けるや、齊王景公政を孔子に問ふ、孔子乃ち齊國の時弊を稽へて曰く、政は財を節するに在りと、齊公悅びつ、尼谿の田を以て孔子を封ぜんと欲す、宰相晏嬰進んで諫めて曰く、

『夫儒者、滑稽（詭辯にして是非を顚倒す）而不可規法、倨傲自順、不可以爲下、崇喪遂哀、破産厚葬、不可以爲俗、游說乞貸、不可以爲國、自太賢之息、周室既衰、禮樂缺有間、今孔子盛容飾繁、登降大禮、趨讓之節、累世不能殫其學、當年不能究其禮、君欲用之以移齊俗、非所以先細民也、』

此評固より過激なりと雖も、亦儒者の通弊に對しては項門の一針たらずんばあらず、

然れども古來最も善く孔子を知れる者は孟子なり、孟子曰く、

『可以仕則仕、可以止則止、可以久則久、可以速則速、孔子也、』

是れ孔子が圓滿なる聖人たることを言ひ顯はせる者にあらずや、孟子又曰く、

『所願則學孔子也、……自有生民以來未有孔子也、』

宰我の語として引て曰く、以予觀於夫子賢於堯舜遠矣と、又有若の見として掲げて曰く、出於其類拔乎其萃自生民以來未有盛於孔子也と、又他處に孟子は伯夷伊尹等を評し、遂に進んで左の如く斷言せり、曰く、

孔子之去齊、接淅而行、去魯曰遲々我行也、去父母國之道也、……伯夷聖之清者也、伊尹聖之任者也、柳下惠聖之和者也、孔子聖之時者也、孔子之謂集大成、集大成也者金聲而王振之也、

孔子は眞に集めて大成したる者とす、之を圓滿の人と稱す、人としては之より以上を望む可らず、陳の司敗なる者魯の昭公は禮を知れりやと問ひければ、孔子は之に答へて昭公は禮を知れりと曰へり、是れ其國に居りては其王を譏らざるを禮とすれば也、而るに孔子の退くや司敗は巫馬期と云ふ人を上座に進めて曰く、吾聞君子不黨、君子亦黨乎、君娶於吳爲同姓、謂之吳孟子、君而知禮、孰不知禮と、巫馬期この事を孔子に告けるに、孔子は何と答へたるぞ、孔子は只言へり、丘也幸、苟有過、人必知之と、固より孔子は

國政を與かり聞きて少正卯を誅したるが如く、時に或は果斷決行の大いに世を驚せし者ありと雖も、平常は實に溫然として玉の如くなりき、宜なる哉門弟子等が之を稱へて、子溫而厲、威而不猛、恭而安と言ひたること、

孔子は斯の如く圓滿なる人なりしかども、其當時には兎角世に容れられず、人に用ひられざりしこそ、偉人豪傑の常とは云へ、遺憾の極みなりけれ、然れども又偉人豪傑の常として歿後には殆んど神明視せらるゝに至れり、五雜俎記者は曲阜に於て孔子の手づから植たりと稱する檜を見て、其狀を書して曰く、

『孔林十里中、雲木參天、上无烏巢、无鴉聲、下无荆棘蒺藜刺人之草、聖人生前不語怪、乃身後著靈異、若此、豈亦以神道設教耶、抑或有地靈呵護之耶、』

是れ固より字面どほりには信ぜられずと雖も、後人が孔子に對する恭敬の情は則ち歷然として此中に見ゆ、此孔子果して世道を裨補し人心を感化するの好結果を生ぜしや、此の問題は支那の社會に稽へて解答するを得べき者とす、

孔子は固より圓滿の人物にして、孔子の教は修身齊家治國平天下に關するだけは完全なる人道なりと雖ども、开が重に世人の舌端に止まりて衷心に徹らざりし者は、職として是れ死生神鬼の大問題を眞面目に講究せざりしに由ると謂はざる可からず、換言すれば、則ち孔子の道は倫理と政治とに專ら其講究を限りて、宗教には成るべく

遠ざからんと欲したれば也、『敬鬼神而遠之可謂智也』とは孔子の主義にてありき、勿論孔子も恭く鬼神(明神)を祭れり、神を祭ること神在すが如くせり、又天を敬ふことを知れり、王孫賈が諂語を引きて與其媚於奥寧媚於竈とは何の謂ぞやと問ふに答へて宣ふらく、不然獲罪於天無所禱也と、又其疾の重るや、子路禱らんと請ひけるに、孔子の曰く丘之禱久矣と、然れども是の如きは文字どほりに解釋すべき者にあらず、是唯孔子が平生の心掛を言ひ顯はせる而已、孔子もソクラテスと仝じく唯習慣として形式的に實地には天を祭り神に事へたれども、ソクラテスと異にして哲學者に非ず、又さりとて宗教家にも非ざりしかば、人生の最大事たる生死の問題は成るべく避けんと試みたり、論語に依れば、季路鬼神に事ふるの道何如んを問ひしに、孔子は未能事人焉能事鬼(當時神を鬼と呼べり)と、更に死を問けるに、又も答て曰く、未知生焉知死と、家語にも亦書す、子貢孔子に問て曰く、死者有知乎將無知乎、孔子答へて曰く、

『吾欲言死者之有知恐孝子順孫妨生以送死吾欲言死者之無知恐不孝之子棄其親而不葬賜不欲知死者有知與無知非今之急後自知之』

斯の如く孔子は生死の大問題を避けて之に面せざりき、是れ儒道の强點なるに相違なしと雖ども、亦が弱點も亦茲に存す、固より孔子も天天と常に天を口に擧說したれども、例へば顏淵の死するや、噫天喪予天喪予と叫び、又匡人に圍まるゝや天之未喪斯文也、匡人其如予何といふが

如く、頻りに天を口にしたれども、アーノルドの『天』の如く、其天は靈知者たる天帝を指すに非ず、甚だ漠然たる自然力を謂へる而已にて、僅かに孔子が粗俗なる唯物論者に非るを證明するに止まれり、

孔子の理想其物もまた甚だ面白からず、夫の春秋の如きは、大義名分を正したりと言はゞ言へ、畢竟一遍の僻說のみ、趙盾弑君流の筆法は其實曲筆なり、直筆には非ず、又詩書を刪定したる如きは亦實に歷史上文學上の大罪人なりと謂はざる可らず、宜なる哉老莊の徒が之を譏るに區々たる人僞を以てしたること、西洋の學者が往々春秋の平凡を說くは、決して故なきに非ず、游夏の徒不能贊一言とは例の支那的誇張のみ、

余輩は孔子が處世の道には感服すれども、其理想には未だ遽かに贊成を表する能はざるを憾む也、而して堯舜を祖述し、文武を憲章すとは孔子教の神髓を簡潔に說き得て復餘蘊なき者と謂ふべし、

釋迦牟尼

凡そ物事は、仔細に之を究むるや、如何なる新事新物にても、必ず其由て來る所あるを見ん、『天下には新き物なし』とは至智所羅門王が斷言せし所にあらずや、孔子の道が堯舜二帝の道を祖とし、文武兩王の法を憲はせしに過ぎずして、換言すれば、儒道は即ち先王の道にてありしが如く、釋迦氏の教道は即ち印度舊來の諸說衆論を集めて大成したる者に外ならざりき、近頃獨逸の大哲學者ドイセン

氏は『世界哲學史』を著はしたるが、其中に彼は佛教を以て婆羅門教の一異端(ヘレシ)と爲せり、高楠順次郎君の如きも、ドイセン氏の弟子なればか、大いに此評の允當なるを認められたるを耳にしたり、

勿論集めて大成したる者は、單に模倣したる者とは雲泥の差あり、支那に於る所謂先王の道(ウエーズ、オヴ、アンシエント、キングズ)は孔子の祖述憲章に由て、其れ自身に在りては、實に圓滿の教體を發する者となりぬ、印度に於る哲學思想は漸々に發達し、遂に釋迦に至りて、自家の流義にては、兎に角圓滿なる者と化したり、但し集めて大成すとは百尺の竿頭更に一歩を轉ずるの謂にして、釋迦牟尼の如きは則ち更に一新生面を開ける者なりと謂ふべし、

世人の遍く知れるは印度(天竺)に四種の階級ありて互に相混和せざりしと云ふ事是なり、之を四箇の種姓と謂ひ、又單に四姓と謂ふ、英語にカスト(元は葡語より出づ)と稱す、一に曰く婆羅門、二に曰く刹帝利、三に曰く毘舎、四に曰く首陀、之を梵語には(一)Brahmana(婆羅門、淨行、梵志)(二)Kshattriya(刹怛利耶、王種、土田主或は兵種)(三)Vaishya(吠奢、毘舎羅、商賈或は農夫)(四)Sudra(輸達羅、農夫或は奴僕)と云ひ、其區別は非常に嚴重にして、互に相越えざるを法とせり、此等の相嫁娶したる混合種姓は更に一等を下りて其職業を制限せられたり、勿論此外にも亦舊土人及び穢多の類は尚更に賤しき者として齒せられざりしかども、是は論外なれば省きて言はじ、

偖此等四姓の中最初の二姓を最も貴しとし、其中又婆羅門を以て最も貴しとし、少くとも理論に於ては然り、如何となれば婆羅門は梵天王(天帝)の口より生れて教誨を司どり、且聖經維陀を所有するが故なりとぞ、

但し婆羅門は神官の類のみ、兵馬を有せず、攻守の干戈は全く之を刹帝利種に附してありしかば、前者は是非とも後者に依頼せざる可らざりき、されば西洋基督紀元前四五百年の時分より漸々に編纂せられ來りし廝奴の法典(Manava Dharma Shastra, the Law-book, or, Institute of Manou)中には、縷々篇を重ね章を疊ねて婆羅門の功德を列載しながらも、同時にまた刹帝利種の爲に治國の軌範を垂れ、王者をば口を極めて推稱したり、故に實際に於ては婆羅門よりも刹帝利の方却つて貴きが如き觀ある也、

既に斯の如く此等兩者互に相並立したれば、自然の勢として權力の爭其間に起るや、兩者往々相軋轢し相爭鬪せり、然りと雖も、是は只爭權のみ、其特殊なる職掌に至りては未だ嘗て相侵犯せざりき、幾百千年も婆羅門は依然婆羅門たり、刹帝利は依然刹帝利たり、是故に夫の不自然の階級は時の社會をして百事に停滯せしめ、文明の度の甚だ著しきにも拘らず、進歩は毫も觀るべき者なからんとす、

是時に當りて迅雷耳を掩ふに暇あらざる底の大大英斷を以て社會上宗教上に一新生面を開ける者あり、未だ四姓の別を全く打破し了らざりしとは雖も、沈滯せる社會

の空氣を攪亂して、天下を風動したるは則ち其功業と稱せざる可らず、

釋迦牟尼は刹帝利種に屬せり、或は云ふ王の子なりと、或は云ふ然らずと、固より印度を統一せる皇帝とては當時無かりしかば、善くも釋迦牟尼は一小王家の出身なりしのみ、單に刹帝利種に屬するだけにても猶王子と稱し得べけん、何となれば刹帝利は王種なりとも言ひ做せば也、偖斯く釋迦牟尼は刹帝利にて有りつゝも、婆羅門の領分に切込みて、先印度在來の哲學を研究し、數論勝論等の五六哲學系中に就きて其粹を拔き、遂に印度哲學の冠冕と も稱すべき深妙なる一大哲學的宗教を發明し、出家得道の法門を開き、刹帝利婆羅門毘舍首陀に論なく一切衆生を悉く網羅して之を濟度せんことを期す、凡そ出家して佛門に入る者は悉く釋と名のらしめらる、曰く

『四海入海同一鹹味、四姓出家同稱釋氏』

又曰く『四姓の出家する者は復本姓なし、只沙門釋子と言ふのみ』と、婆羅門たる者も復婆羅門と言はず、戒陁羅たる者も復戎陀羅と言はず、皆佛法海中に沒し了はる者とす、恰も基督を信ずる者が悉く基督教徒と稱するが如く、眞神を認めたる者が皆神の民と名のるが如し、固より宗教上に於ては珍らしき事には非ずと雖も種姓の區別喧すかりし印度に於ては兎に角一大英斷と謂はざるを得ず、但し其所謂釋氏又は釋子及び沙門は畢竟如何なる意味なる乎、

釋とは勿論釋迦の畧なり、梵音にはシャキャと云ふ、是れ元は釋迦牟尼の屬せる刹帝利種族の總名にして、彼れ一人の私名には非ざりしと云ふ、釋迦牟尼は本姓を瞿曇（訛りて瞿曇と云ひ又喬曇彌等と云ふ）と稱し、其種族を釋迦と號す、其何故に「ガウタマ」と稱し、其何故に「シャキャ」と號せしかと尋ぬるに、一々由て來る所あるが如く說かれありと雖も、固より悉くは信ず可らず、先づ瞿答摩の由來としては經に說て曰く、佛刼初に國王と作りしが位を禪るや瞿答摩と云ふ僊人（隱遯者也）を師として道を修め、常に某一園に游止せしに、賊の殺害する所となりしかば、該僊人乃ち其血を取りて兩團となし、器に盛りて左右に置き、之を咒りて十月に滿ちけるに、左は化して男と爲り、右は化して女と爲りぬ、因て

之にガウタマの姓氏を命じたり、是れ釋迦牟尼佛の祖先なり、此の古傳に依ればガウタマの姓は开が師たりし『仙人』より出たる者と謂はざる可らず、然るに佛教家は是れ釋迦氏の居城が地上最第一なる故に名けたる者なりとして、之を地最勝と譯したり、畢竟撞着の見たるを免かれざる也。

次に「釋迦」てふ文字に至りては、是亦相應の由來談あるも決して怪むべからず、

瞿曇（釋迦牟尼）の祖先に甘蔗王と云ふあり、後妃の讒言を聽て其四太子を逐ひ出せしかば、四太子去つて雪山の北に至りしに、大樹直林の枝條蓊鬱たる者あり、奢夷者耶と名づけ、又直林或は直樹林と稱す、此奢夷林に接近して城

を築き舍を營み、更に舍夷國と號す、然るに此等四太子德を以て人を歸服せしめたれば、忽ちにして鬱然强國となりぬ、甘蔗王悔憶して、使を四子に遣はし、切に其歸らんことを勸めけれども、辭して還へらざりしかば、父王乃ち三歎して曰く、我が子は皆能く自ら存活す、眞に釋迦なりと、釋迦とは有能（有力）なるの謂とす、故に秦時代には之を能と翻譯せり、又直と翻譯せるもありき、所謂直林氏是なり、但し此の直林氏は釋迦てふ文字の意譯と曰んよりは寧ろ舍夷者耶の義譯と稱すべく、即ち舍夷氏と殆んど同一なる者と知るべし、舍夷は貴姓の稱とす、

該釋迦族の中にて第四太子尼拘羅を以て佛祖とす、即ち尼拘羅に子あり、俱盧と名く、俱盧に子あり、瞿俱盧と名く、瞿俱盧に子あり、師子頰と名く、師子頰四子あり、一は首圖默那と名く譯して淨飯王と稱す、是れ即ち釋迦牟尼の父なり、

前に說きし如く、釋迦は種族の名なりしかども、今は瞿曇氏の專有の如く成りて、遂には之が姓となりぬ、是れ固より自然の勢にして毫も怪しむに足らず、故に曰く釋迦是姓、牟尼是字と、隨つて一切の佛徒を悉く釋氏と號すること前述の如し、牟尼は釋迦の箇名にして古來寂默または寂靜と譯す、何故に又釋迦を牟尼と名けたるやと尋ぬるに、經には說て曰く、他の釋迦種族皆天性憍慢多言なりしが、悉達太子を見るに及んで皆悉く默然たりき、故に父王曰く牟尼と名を命ずべしと、但し其實は釋迦と云ひ牟尼

と云必しも瞿曇佛の專有に非ず、例へば釋迦密多羅など云ふ稱呼あるが如く、仙人の名に又拘那舍牟尼(迦諾迦牟尼)と云ふ者あるを見るの類なり、

然るに佛者は例の如く屋上に屋を架して之を强說し、理想的に牽合して曰く、釋迦とは能仁の義にして、开が大慈大悲衆生を濟度するを表し、牟尼とは寂默の意にして、其智慧の理に冥ひ眞に即くを謂ふと、又身牟尼、語牟尼、意牟尼てふ三牟尼を立てゝ曰く、諸の煩惱皆寂默するが故に爾か云ふと、併し乍ら此の如きは耶蘇基督といふ名が一は救世主の義を有し、一は灌頂王の義を有するが如くにして、要するに姓名も亦靈化する而已、

嘗て或る學者の如きは釋迦の存在を疑ひ、之を以て拜日教の一發展に過ぎずと爲したれども、釋迦牟尼の存在したることは種々に證據の徵すべき者あれば、今日にして之を疑ふは基督の存在を疑ふと同じく輕擧妄動たるを免かれざる也、

近頃釋迦牟尼の身分及び人種に關して種々の說をなす者あり、先づ釋迦の家は王に非ず、只王種の一豪族のみと、固より當時は印度を統一したる帝王ありしに非れば、實は只小弱なる數多の刹帝利族が四方に割據しをりたるに止まれり、之を王と呼ぶも、酋長と呼ぶも、豪族と呼ぶも、大いなる差違あるを見じ、

次に釋迦と云ふ姓に稽がへ、又开が雪山の北に起りしと云ふに徵して或る人の如きは說をなして曰く、釋迦

牟尼は所謂るトラニアン人種に屬する者にして、印歐人種に屬する者にあらず、換言すれば釋迦牟尼は日本人種と同じく亞細亞人種に屬する者にして、高加索人種卽ち歐羅巴人種に屬する者に非ずと、讀者諸君の知らるゝ如く、印度人は印度歐羅巴人種(印歐人種)と云て、今の英獨人等と其先祖を同じうす、即ち拉甸希臘人民の兄第にてありき、今論者は極めて薄弱なる臆說に基づきて釋迦牟尼をトラニアン人種と爲し、得々として曰く、釋迦旣に蒙古人種の一派に屬すれば、日本人民と兄弟なり同人種なりと、嗚呼何ぞ其心術の兒戲に均しきや、勿論佛敎は天下の大宗敎なり、然れども厭世敎の開祖にして幾億萬の人衆に進取の氣象を失なはしめ

し者は決して亞細亞人種の大恩人と稱すべからず、ミラボウ、ヴォルテールが佛蘭士人中の最も佛蘭士的なる者なりしが如く、釋迦牟尼は印度人中の最も印度的なる者なりき、釋迦牟尼が印歐人種にして眞に天竺人なりしことは、唯に其傳記上に顯はれたるのみならず、又其思想上に顯はれて明確たる者あるを奈何せんや、

按ずるに基督敎が猶太敎中より、新約書が舊約書中より出で來りし如く、佛敎は婆羅門敎中より進化し來れり、是れ佛敎の强點にして、又同時に佛敎の弱點なりとす、其强點たるは則ち釋迦牟尼が婆羅門敎の擅制主義を打破して、平等均霑の大主義を宣傳したるに在り、其弱點たるは則ち佛敎が婆羅門敎の厭世悲觀主義を襲蹈したるに在

り、實に佛教中に出たる教理は殆ど悉く舊來の宗教、卽ち婆羅門教の諸宗派中に既に行用せられてありき、例へば出家と云ふ事は佛教にとりては最も重要なる行爲にして、其功德の大なるや一人出家すれば九族天に生ると稱する程なるが、其出家の事すらも既に是れ婆羅門教の發明に係る者なるを奈(いかん)ともする無し、

抑も出家は梵語に舍羅摩拏(スラマナ)と曰ひ、又パリ語に沙門(シャマン)と曰ふ、又桑門と云ふ、出家する者は善品を勤修して諸惡を止息すればとて、唐には勤息と翻し、秦には勸行と譯す、行とは涅槃に行趣するの謂なりとぞ、又善覺と義譯す、要するに沙門は出家の總稱都名なり、實に沙門は諸の纏聚を離れ、恩愛を捨てゝ非家に趣く者とす、故に出家と稱す、出家

せざる者は正當に佛門に入るを得ず、然るに此出家法も又是れ釋迦牟尼佛が婆羅門に學びたる者とす、彼は三門に老病死を見、一門に遁世者を見て、遂に出家修道の志願を起したりと稱す、是卽ち釋迦牟尼が出家遁世の道を所謂外道に學びたりし明證にあらずして何ぞや、

實に出家遁世は婆羅門の一美德と稱せし所なりき、外道の出家も亦た沙門と號せり、釋迦は只其出家の目的を幾層高尙にしたる而已、佛教に於ては沙門は八正道を修習すべき者とす、曰く正語正業正命正定正勤正念正見正思惟、此中前三は持戒の領分に屬し、煩惱を折伏するを以て目的とす、――中三は禪定の領分に屬し、煩惱を遮斷するを以て目的とす、――後二は智慧の領分に屬し、煩惱を滅

盡するを以て目的とす、換言すれば、是卽ち戒・定・慧の三德を修めて諸の有漏業を脫するを本領とする者とす、此戒定慧は佛敎の三大利器にして、至道の由戸涅槃の關要と稱し、之を譬へては曰ふ、戒者斷三惡之干將也、禪者絕分散之利器也、慧者齊藥病之妙醫也と、勿論出家は外形なれば、之に相當する精神なくんば有るべからず、『人若し信なくんば、我が大法海に入る能はざること枯樹の華實を生ぜざるが如し、剃頭染衣して種々の經を讀み、能く難じ能く答ふとも、佛法中に於ては空く所得無けん』、遂に又說を進めて曰く、汝若し無上菩提心だに得ば、卽ち是れ出家したる也と、出家の精神だにあらば、白衣(俗)と雖も却て眞の出家なりと也、

次に佛經の終極目的は所謂『涅槃』に在り、梵語に之をニルバナ(涅槃那)と云ひ、パリ語に之をニッバン(泥洹)と云ふ、佛道の究竟の妙境にして、終極の眞理と稱す、支那に寂滅又は滅度、又は不生不滅、又は彼岸と曰ふ、又其中有餘の涅槃、無餘の涅槃等ありと雖も、是等は寧ろ後世の主張にして、實は只單箇の涅槃を以て終極の圓寂境を言ひ顯はす者とす、唯これを尊重して摩訶波利涅槃那と曰ふは可なり、大槃涅槃と稱す、此の圓寂境に達すれば、恒に淸涼にして復生死なく、心は智を以て知る可らす、形は像を以て測る可らず、其名けん所以を知る莫し、强て之を寂と謂ふ、之を終極の佛果とす、

然るに此の至極重要なる涅槃すらも釋迦牟尼の發明に

あらず、亦是れ波羅門其他の宗派に於て夙に唱へし所の者なりき、釋迦は例の如く惟其意味を主張したる而已、然れば上にも說きし如く、學者が佛教を以て婆羅門教の一異端となすも無理ならぬ事と謂ふべし、

若し阿羅邏仙人が釋迦に答へたる語を見ば、此等の諸事は明瞭なる者あらん、釋迦牟尼初め王宮を脫け出でし時先づ跋伽仙人（仙人とは隱遯家の事を謂ふ者とす）を訪ひて後、當時第一の高德なる仙人、阿羅邏が許に往きて、生老病死を斷ずるの道を問ひしに、阿羅邏仙人答て曰く、衆生之始、從於冥初、起於我慢、從於我慢生於癡心、從於癡心生於染愛、從於染愛生於五欲、從於五欲生於五大、從於五大生貪欲瞋恚等諸煩惱、於是流轉生老病死憂悲苦惱と、而して其生死の本

を如何して斷絕せんと尋ぬるや、仙人又曰く、出家遯世、修持戒行、謙卑忍辱、住空閑處、修習禪定、離欲惡不善法、離於種々相、入非想非非想處、此處名爲究竟解脫、是諸學者之彼岸也と、（五欲は色聲香味觸の覺官的、五大は地水火風空の五元素）

夫れ禪定（禪那と云ひ、靜慮と譯す、又單に禪と云ふ、思惟修なり）は佛教に於て戒定慧てふ三大德（上に出たる出家論の下を參看せよ）の一に算へたる者なるが、是また既に數論派の婆羅門が唱へたる所に係り、其他解脫も彼岸（涅槃なり）も亦既に彼の徒が說ける所にてありき、而して其所謂非想非非想處は釋迦の大槃涅槃（寂滅）と相去る一歩のみ、

惟に是のみならず、釋迦より却て早く（少なくとも同時代に）印度には刹帝利種（王種）にして既に一種の佛教を開きたる者あ

りたり、是れ最も奇とすべし、今日印度には佛教殆んど地を拂ひて信者絶無と謂ふも可なり（錫蘭島は佛教盛なれども）、惟一種の類似佛教ジアイナ教と稱する者多少行なはれて佛陀教の殿軍たるを見る而已、傳へ云ふ此のジアイナ教は其最後の教祖摩訶毘羅まで既に二十三代を經たりと稱す、而して其最後の教師マハビラは西洋紀元前六百年の頃世に出でたりと稱す、此マハビラはタンダグラムと名くる都會にて、悉達多（釋迦の幼名悉達と同じ）と名くる王の正妃トリサラの胎より生れたり、其名をバルダマナと呼べり、其父母の死後世を捨てゝ難行苦行を積み、十二年の後遂に一切智を得、解脱涅槃の道を發見し、徧く世間を教化せしが、殊に摩伽陀國を以て其布教の中心となせり、故に其經典は重

に摩伽陀方言を以て書かれたり、彼が苦行せるや、一年の後其衣服を悉く脱ぎ捨てゝ全く裸體となりしかば、露形外道（裸體外道）と佛者に指斥せられたるが、梵語に之をニルグランタスと名くるが故に、支那佛徒は之を尼乾子と音翻せり、是また僧企耶派（數論派）の哲學を大いに採用したる者にして、隨て又佛教と甚だ相似たる所多し、彼等もまた阿含經てふ者を有す、彼徒もまた一種の涅槃を有す、只釋迦の涅槃の如く高遠深大ならざる而已、彼等も佛者と仝じく殺生を忌みて、而して更に之より甚だしき者あるを見る、其篤信家に至りては、恐らくは生物を殺さんと て、水を漉さざれば飲まず、地を掃ざれば歩かず、口に紗を當てざれば呼吸せず、又無花果の如く種子を菓身中に藏

する物を食はず、肉食には手だも觸るゝを憚かる、

斯の如く見きたれば、釋迦牟尼の創見新作は果して何に在る乎を知る能はざるが如し、創見新作は爾く無しと雖も、從來の教義を取て之を精煉し、更に幾層之を高遠したるは則ち確かに有り、然れども元來印度哲學の思想たるや、愈よ之を高遠にすれば愈よ人情に遠ざかる者なりしかば、釋迦の宗教は(孔子の道の純乎たる人間教なるに引かへて)、極端なる非人間教となりて、怜れなる失敗を招きたり、如何となれば人間に在りて非人間教を主張する者馬んぞ失敗せざるを得るや、世中に在りて厭世主義を唱導する者爭でか成功を期し能はんや、宜なる哉天下第一の高遠なる宗教が最も迷信に富める偶像教に墮落し畢

りたること、凡そ人情に悖ることを世に行なはんとするは、水を山へ上さんと試るなり、沙を以て繩綯んと務むるなり、諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂的、妻子珍寶及王位臨命終時不隨者的なる厭世教悲觀主義は到底此世に成立つべき者に非るを奈何せんや、

斯の如く儒教は純乎たる人間教を以て失敗し、釋教は純乎たる非人間教を以て失敗せり、然らば基督教は如何ん、

耶蘇基督

耶蘇基督は猶太王ダビデの裔として今より凡そ一千九百三年前パレスタインに生れたり、若し孔子を以て今より二千四百五十四年前に(周の靈王二十一年に)生れたりとせば、——若し又釋迦牟尼を以て西洋基督紀元五六百

年前に生れたりとせば、――蘇耶は此等三聖の中にて最も晩く出たる者なるや論を俟たず、然れども基督は摩西の所謂る『律法』を圓成せしめたる者なれば、其由て來れる所は却て最も遠しと謂はざる可らず、佛教にても其信仰の道を『法』と名けたり、梵語に之をダルマと云ひ、パリ語にダンマと云ふ、妙法佛法教法等の法是なり、舊約聖書中にても又亦教道を『法』若くは『律法』と稱す、希百來語にては之をトラと云ふ、例へば神の律法をトラ、エロヒームと云ひ、摩西の律法をトラ、モーシェと云ふが如し、梵語に在ても希百來語に在りても俱に是れ人を裁判すべき法律を謂ふに非ず、更に幾層高尚なる教道を謂へる者とす、

釋迦牟尼の佛道は釋迦の生るゝ僅か二三百年前より漸

々に分岐し來れる印度哲學に胚胎し又反抗して起れる者にして、終に印度の六大哲學系（南世師、僧祇耶等六）を完成せしめたりとは雖も、是は破壞的に、即ち破邪顯正的に之を完成せしめたる者とす、其由て來る所の淺きや一目に瞭然たり、決して是れ最古の四維陀經を圓成せしめたる者には非ず、却つて之を迷信として排擯したる者なりき、而して自らは六大哲學系中の第六（最近なる者）即ち數論に則りし者なること上に說けるが如し、

基督教は然らず、摩西の五經を主張發展して遂に圓成せしめたる者とす、之に反對して起りしには非ず、即ち基督は自ら明言して曰く（馬太五章十七節）『われ律法と豫言者を廢する爲に來れりと思ふ勿れ、我來りて之を廢るに非ず、成就

せん爲なり』、此の『律法』とは卽ち摩西の五經（創世記等中）を指し、『預言者』とは以賽亞、耶利米亞、以西結爾等の所謂預言書を指し、此等を合して之に歷史の書（列王紀撒母耳等）を加ふれば則ち舊約聖書の全體を構成す、然れば基督の彼の言は畢竟左の如く謂へる者とす、『我は舊約を廢せんとて來るに非ず、却つて之を完結圓成せしめん爲に來れる也』

孔子は堯舜を祖述し文武を憲章し、只管先王の道を講じたる而已にして、別に一系の道を立てたるに非れば、姑く措き、釋迦牟尼は前述の如くなれば、基督は年代こそ新らしけれ、其建てたる宗教に於ては最も古き者と謂はざる可からず、之を譬ふれば、舊約は根幹にして、新約は花葩なり、舊約は體軀にして、新約は冠冕なり、不信者或は門外漢

は之を疑んも、基督は舊約の預言に應じて降誕したる救世主なりと稱す、是れ基督及び其直弟子の一齊に唱へし所に係る、請ふ本書二十五六頁に揭げたる舊約聖書中なる最大預言書、以賽亞書第十一章の文を再閲せよ、該文章は基督がダビデ王の系統より出んことを基督より六百五六十年前に預言したる者と信ぜらる、如何となればエツサイは卽ちダビデ王の父なりければ也、新約書馬太一章及び路加三章を參看せよ、

然らば基督教の根幹たりし舊約（摩西教）は果して如何なる者ぞや、曰く、是れ唯一神教にして正義を基礎とせる者なり、幾多の預言者が卓勵風發以て公侯庶民を警醒提撕したる者は斯の正義を絶對的に主張するに在りき、此の

精神を基督は夫の天下に著明なる山上垂訓を以て、舗張したり、印證したり、卽ち馬太福音書第五六七章に曰く、

イエス許多の人を見て山に登り坐し給ければ弟子等も其下に來れりイエスロを啓て彼等に敎へ曰けるは心の貧き者は福なり天國は卽ち其の人のものなれば也哀む者は福なり其の人は安慰を得べければ也柔和なる者は福なり其人は地を嗣ことを得べければ也饑渴く如く義を慕者は福なり其人は飽ことを得べければ也矜恤ある者は福なり其人は矜恤を得べければ也心の清き者は福なり其人は神を見ことを得べければ也和平を求る者は福なり其人は神の子と稱へらる可れば也義ことの爲に責らるゝ者は福なり天國は卽ち其人の者なれば也我ために人なんぢらを詬誇また迫害いつはりて各樣の惡言をいはん其時は爾曹福なり喜び樂め天に於て爾曹の報賞おほければ也そは爾曹より前の預言者をも如此せめたりき○爾曹は地の鹽なり鹽もし其味を失はゞ何を以か故の味に復さん後は用なし外に棄られて人に踐

るゝ而已爾曹は世の光なり山の上に建られたる城は隱ることを得ず燈を燃して斗の下におく者なし燭臺に置て家に在すべての物を照さん此の如く人々の前に爾曹の光を輝かせ然れば人々なんぢらの善行を見て天に在す爾曹の父を榮べし○われ律法と預言者を廢る爲に來れりと意ふ勿われ來て之を廢るに非ず成就せん爲なりわれ誠に爾曹に告ん天地の盡ざる中に律法の一點一畫も遂つくさずして廢ることなし是故に人もし誡の至微き一を壞り又その如く人に敎なば天國に於て至微き者と謂れん凡そ之を行ひ且人に敎る者は天國に於て大なる者と謂るべし我なんぢらに告ん學者とパリサイの人の義よりも爾曹の義ことと勝ずば必ず天國に入ことを能じ○古の人に告て殺ことと勿れ殺す者は審判に干らんと言ることと有は爾曹が聞し所なり然ど我なんぢらに告ん凡て故なくして其兄弟を怒る者は審判に干らん又その兄弟を恐者よといふ者は集議に干らん又狂妄よといふ者は地獄の火に干るべし是の故に爾もし禮物を携へて壇に往たる時かしこにて兄弟

に恨るゝことあるを憶起さばその禮物を壇の前に留まず往て爾の兄弟と和ぎ後きたりて爾の禮物を獻よ爾を訟ふる者と偕に途間にある時はやく和げよ恐くは訟る者なんぢを審官に付し審官また爾を下吏に付し遂に爾は獄に入られん我まことに爾に告ん分釐までも償はざれば必ず其所に出ることを能ざる也○古の人に告て姦淫することなかと言ることあるは爾曹が聞し所なり然ど我なぢらに告ん凡そ婦を見て色情を起す者は中心すでに姦淫したる也もし右の眼なんぢを罪に陷さば抉出して之を棄よ蓋五體の一を失ふは全身を地獄に投入らるゝよりは勝れりもし右の手なんぢを罪に陷さば之を斷て棄よ蓋五體の一を失ふは全身を地獄に投入らるゝよりは勝れり○また曰ることあり凡そ人の妻を出さんとせば之に離縁狀を與ふべしと然ど我爾曹に告ん姦淫の故ならで其妻を出す者は之に姦淫なさしむるなり又出されたる婦を娶る者も姦淫を行ふなり○また古の人に告て僞の誓を立ること勿れなんぢ誓ふ所は必ず主に遂べしと言ることあるは爾曹

が聞し所なり然ど我なんぢらに告ん更に誓こと勿れ天を指て誓ふ勿れ是神の座位なれば也地を指て誓ふこと勿これ神の足凳なれば也エルサレムを指て誓ふこと勿これ大王の京城なれば也爾の首を指て誓ふ勿そは一すぢの髮だに白し黑することを能ざれば也爾曹たゞ是々否否といへ此より過るは惡より出るなり○目にて目を償ひ齒にて齒を償へと言ること有は爾曹が聞し所なり然ど我なんぢらに告ん惡に適することと勿れ人なんぢの右の頰を批ば亦ほかの頰をも轉して之に向よ爾を訟て裏衣を取んとする者には外服をも亦とらせよ人なんぢに一里の公役を强なば之と偕に二里ゆけ爾に求る者には予へ借んとする者を卻る勿れ○爾の隣を愛みて其敵を憾べしと言ること有は爾曹が聞し所なり然も我なんぢらに告ん爾曹の敵を愛み爾曹を詛ふ者を祝し爾曹を憎む者を善視し虐遇迫害ものゝ爲に祈禱せよ如此するは天に在す爾曹の父の子とならん爲なり夫天の父は其日を善者にも惡者にも照し雨を義き者にも義からざる者にも降せ給へり爾曹おのれ

を愛する者を愛するは何の報賞かあらん稅吏も然せざらん乎安否を兄弟にのみ問は人より何の過たる事かあらん稅吏も然せざらん乎是故に天に在す爾曹の父の完全が如く爾曹も完全すべし

なんぢら人に見せん爲に其義を人の前に行ことを慎めもし然らずば天に在す爾曹の父より報賞を得じ是故に施濟を行とき人の榮を得ん爲に會堂や街衢にて僞善者の如く箴を己が前に吹しむる勿れ我まことに爾曹に告ん彼等は既にその報賞を得たりなんぢ施濟するとき右の手の爲すことを左の手に知ずる勿れ如此するは其施濟の隱れんが爲なり然ば隱たるに鑒たまふ爾の父は明顯に報たまうべし○なんぢ祈る時に僞善者の如くする勿れ彼等は人に見られんが爲に會堂や街衢の隅に立て祈ことを好われ誠に爾曹に告ん彼等は既にその報賞を得たりなんぢ祈る時は嚴密なる室にいり戸を閉て隱微たるに在す爾の父に祈れ然ば隱微たるに鑒たまう爾の父は明顯に報たまうべし爾曹祈る時は異邦人の如く重複語を言なかれ彼等は言おほきを以て

聽れんと意へり是故に彼等に效こと勿れ爾曹の父は求ざる先に其需用物を知たまへば也然ば爾曹かく祈るべし天に在ます我儕の父よ願くは爾名を尊崇させ給へ爾國を臨らせ給へ爾旨の天に成るごとく地にも成せ給へ我儕の日用の糧を今日も與たまへ我儕に負債ある者を我儕がゆるす如く我儕の負債をも免たまへ我儕を試探に遇せず惡より拯出し給へ國と權と榮は窮なく爾の有なればなりアメン爾曹もし人の罪を免さば天に在ます爾曹の父も亦なんぢらを免し給はん然どもし人の罪を免さずば爾曹の父も爾曹の罪を免し給はざるべし○なんぢら斷食するとき僞善者の如き憂容をする勿れ彼等は斷食を人に見せん爲に顏色を損ふ我まことに爾曹等に告ん彼等は既にその報賞を得たりなんぢ斷食する時は首に膏をぬり面を洗へ如此するは爾の斷食人に見ずして隱微たるに在す爾の父に現れんが爲なり然ば隱微たるに鑒たまう爾の父は明顯に報たまうべし○蠹くひ銹くさり盜うがちて竊む所の地に財を蓄ふること勿れ蠹くひ銹くさり盜穿て竊ざ

る所の天に財を蓄ふべし蓋なんぢらの財の在ところに心も亦ある可
れば也○身の光は目なり若なんぢの目瞭かならば全身も亦明なるべ
し若なんぢの目眊らば全身暗かるべし是故に爾の中の光もし暗から
ば其暗こと如何大ならず乎人は二人の主に事ること能ず蓋これを惡
かれを愛み此を親み彼を疎べければ也なんぢら神と財に兼事ること
能はず是故に我なんぢらに告ん生命の爲に何を食ひ何を飲また身體
の爲に何を衣んと憂慮こと勿れ生命は糧より優り身體は衣よりも優
れる者ならず乎なんぢら天空の鳥を見よ稼ことなく穡ことを爲ず倉
に蓄ふることなし然るに爾曹の天の父は之を養ひ給へり爾曹之より
も大に勝るゝ者ならず乎爾曹のうち誰か能おもひ煩ひて其生命を寸
陰も延得んやまた何故に衣のことを思わづらうや野の百合花は如何
にして長かを思へ勞ず紡がざる也われ爾曹に告ん○ソロモンの榮華の
極の時だにも其裝この花の一に及ざりき神は今日野に在て明日爐に
投入らるゝ草をも如此よそはせ給へば況て爾曹をや嗚呼信仰うすき

者よ然ば何を食ひ何を飲なにを衣んとて思わづらう勿れ此みな異邦
人の求る者なり爾曹の天の父は凡て此等のものゝ必需ことを知たま
へり爾曹まづ神の國と其義とを求よ然ば此等のものは皆なんぢらに
加らるべし是故に明日の事を憂慮なかれ明日は明日の事を思わずら
へ一日の苦勞は一日にて足れり

人を議すること勿れ恐らくは爾曹も亦議せられん爾曹が人を議す
る如く己も議せらるべし爾曹が人を量ごとく己も量らるべしなんぢ
兄弟の目にある物屑を視て己が目にある梁木を知ざるは何ぞや己の
目に梁木のあるに如何て兄弟に對て爾が目にある物屑を我に取せよ
と曰ことを得んや僞善者よ先おのれの目より梁木をとれ然ば兄弟の
目より物屑を取得るやう明かに見べし犬に聖物を與ふる勿れまた豕
の前に爾曹の眞珠を投與る勿れ恐くは足にて之を踐ふりかへりて爾
曹を噬やぶらん求よ然ば與られ尋よ然ばあひ門を叩よ然ば開かるゝ
ことを得ん蓋すべて求る者は得尋る者はあひ門を叩く者は開かる可

ればなり爾曹のうち誰か其子パンを求んに石を予んやまた魚を求んに蛇を予んや然ば爾曹惡き者ながら善賜を其子に與ふるを知まして天に在す爾曹の父は求る者に善物を予ざらん乎是故に凡て人に爲られんと欲ことは爾曹また人にも其ごとく爲よ是律法と預言者なる也

○窄き門より入よ沈淪に至る路は濶その門は大なり此より入もの多し命に至る路は窄その門は小し其路を得もの少なり○僞の預言者を謹めよ彼等は綿羊の姿にて爾曹に來れども內は殘狼なり是その果に由て知べし誰か荊棘より葡萄をとり蒺藜より無花果を採ことをせん凡て善樹は善果を結び惡樹は惡果を結べり善樹は惡果を結ばず惡樹は善果を結ぶこと能ざる也凡そ善果を結ざる樹は斫れて火に投入らる是故に其果に由て之を知べし○我を召て主よ主よと曰もの盡く天國に入に非ず唯これに入者は我天に在す父の旨に遵ふ者のみ也其日われに語て主よ主よ主の名に託てをしへ主の名に託て鬼をおひ主の名に託て多く異能を行しに非ずやと云ふもの多からん其時かれらに

告げわれ嘗て爾曹を知ず惡をなす者よ我を離去と曰ん是故に凡て我この言を聽て行ふ者を磐の上に家を建たる智人に譬へん雨ふり大水いて風ふきて其家を撞ども倒ることなし是磐を基礎と爲たれば也凡て我この言を聽て行はざる者を沙の上に家を建たる愚なる人に譬へん雨ふり大水いて風ふきて其家を撞ば終には倒てその傾覆大なり｜エス此等の言を語竟たまへるとき集りたる人々その敎を駭きあへり

そは學者の如くならず權威を有る者の如く敎たまへば也

是れ基督敎の神髓なり、古來此大文字を讀みて基督の神たるを信ぜし者鮮なからずとかや、兎に角之を以て夫の寂滅爲樂主義の佛敎に比すれば、實に天淵の懸隔の其間に存するを見ん、余は言へり儒道は純乎たる人間敎なり、佛道は純乎たる非人間敎なりと、今言はん基督敎は神人合一敎なりと、基督は天帝と人類との間に立ちて救贖の

任に當れりと稱す、此の救贖を(英語に)アトーンメント atonement と名く、アトーンメントはアト at 及びワン one にて、即ち合一の義なりとす、既に至正至義の神に合一せんとするが故に、飽までも罪てふ者を憎むを以て精神とす、極めて正義を尚ぶを以て念と爲す、想ふに基督教の神學書は佛典と仝じく殆んど無尖數なれども、要點は則ち此に存すと謂ふべし、

第三章　三聖の教化

人間には啻に飲食男女の大慾存する而已ならず、又生死てふ大問題の心腦を惱ます者あり、然るに孔子は全く此等の大問題を措きて論ぜざりき、上にも說きし如く、人の

死を問ふ者あれば、『未だ生を知らざれば、焉んぞ死を知んや』と言ひて、其質問を採潰せり、人をして口を箝ましむるには崛强の辭なれども、眞理の爲には必らずしも利せじ、但し是れ亦『知らざるを知らずとする是れ知る也』との精神なる乎、然らば何ぞ明々白々に其無知を口外せざる乎、殊に子貢の問に答へたる曖昧の言辭の如きは、好學を以て自ら任ずる孔子の說とも思はれざるを奈何せんや、余輩は今一たび之を左に抄錄せん、

『子貢孔子に問て曰く、死者知覺ある乎將知覺なき乎、孔子曰く、吾れ死者知覺ありと言んと欲すれば、孝子順孫が生を妨げて死を送らんを恐るゝを奈何せん乎、吾れ死者知覺なしと言んと欲すれば、不孝の子が其親を棄

てゝ葬らざらん事を恐るゝを奈何せんや、賜(子貢の諱)や死者の知覺あると知覺なしとを知らんと欲する如きは、今の急務に非ず、後おのづから之を知ん、』

是れ豈眞理を探求する學者の精神ならんや、楊墨の精神に及ばざる甚だ遠し、要するに孔子は哲學(フヰロソフヰア)者に非る也、

孔子は唯現世的言動に注目するを以て畢生の能事とす、

汗が神を祭れる如きは多くは一片の禮式として之をなせし而已、孔子は縱しや無神論者に非ずとも(孔子自らは敬虔なる行動多りか)少なくとも無宗教家にてありき、無宗教とは讀んで字の如くにして、決して不道德の謂にあらず、

斯く孔子は生死の大問題を敬して遠ざけたり、故に其教化は深く人々の骨髓に徹せざりき、善くとも膚寸のみ、隨つて虛禮空儀に流れ易し、兎に角精神的ならざりき、嗚呼、無宗教的道德倫理果して世を風化し得るや否やは儒教最も善く之を吾人に證驗したりと謂ふべし、

夫れ人は或る意味にては宗教的動物なり、而して宗教は生死の大問題を執へて其本領と爲す、然るに孔子の教は之を兩つながら措て用ひず、剩さへ孔子の言行は餘りに圓滿高尙にして凡俗の到底企及し得べきに非ず、而して衆人を此の理想境に助けのぼすべき慈眼愛腸の其間に媒介たる者無し、是れ儒教をして社會に活勢力たらしむる能はざりし所以なりとす、古來新主義を唱へ出せる人々の中いづれか其道を以て一種の宗教となせる者多きは、或は自然の事ならんと雖も、全く此の必要に基く者と

す、哲學者ピツサゴラス然り、プロチナス然り、社會學者コント然り、社會主義家サン、シモン然り、オーウエン然り、支那人が人間としては最も圓滿なる聖賢を有しながら、遂に世界中最も不道德なる者となり下りたるは、社會學者倫理學者等の大いに考究すべき所なるべし、是亦其盲從的諳誦的教育法の馴致したる弊にも有ること勿論なりとす、支那の教育法は啻に開發的ならざる而已ならず、却つて進歩を阻碍したれば、進歩せざる者は退歩し、日新ならざる者は腐敗すと云ふ原則に循ひて、支那人は彼が如く墮落したる者のみ、

以上縷々絮說し來りし如く、儒道は初より其本國に排斥せられ、漢以後僅かに其名を祗敬せられたれども、多くは

腐儒の空談となりて、社會には殆んど實力とならざりき、墨子晏子韓非李斯等をして適ま先見の明を誇らしむるこそ哀しけれ、今日儒教を以て倫理界の能化力となさんと試る如きは、殆んど死馬に鞭うつの類のみ、余輩は孔子を尊敬すること甚だ厚しと雖も、其教が感化力に乏しきことは、認めざらんとすとも能はず、

次に釋迦牟尼の教は此世を無明（迷妄）の幻造物と見做して一刻も早く此世を滅盡するを以て主義とす、如何となれば生老病死を全脫せんと務むること其精神なれば也、徹頭徹尾此世を虛妄視して之を超越せんと計る者安んぞ此世を此世として教化し得んや、佛教の大目的は寂滅涅槃に達するに在るが故に、凡そ此目的を達するに利なる

物事は皆善なり、然らざる物事は皆悪なり、故に佛教にして人倫を説き忠孝を談ずるは自家撞着の所爲と謂はざる可からず、吾が友人嘗て佛教道徳の性質を詳論したるあり、未だ盡せりとは謂ふ能はざれども、亦大いに參考に資せずんばあらず、因て左に之を摘錄す、

『古今道徳の如何を論ずる者甚だ多し或人は云ふ道徳は虚位たり或人は言ふ道徳は定名なりと或人は言ふ道徳は實益なり或人は言ふ道徳は天命なりと其説く所千差萬別なり然りと雖も其衆説の中尤も廣く天下に行はれて賢人君子に是認せられたる者は道徳を以て天の命にして萬代不易なる者と爲すの説なりと思はる即ち道之本源出於天而不可易矣と云ふ者此類なり天道と云ふ者已に天より出れば之を天の命と稱す其道を行ふ事を徳と云ひ又其道をも徳と呼ぶなり我未見好徳如好色者也と云ふところの徳は則ち此二義を具する者なり此道と此徳とを合せて之を一語と爲ば則ち道徳となる吾人が支那字の上に就て道徳の意義を解する事大抵是の如し然れば道徳は虚位にあらざるが如し單に徳とのみ言ふ時は善徳惡徳の名ある可しと雖も道徳と幷稱する時は其義一に歸す可し

道徳は是の如く天の定むる所の者なりと云ふが其天の定むる所の理は是畢竟如何なる者なるや其大體を知らずんばある可らず澳國の法律學者アルンツ、リテル、フォン、アルテスベルク氏は法律と道徳の區別を説て曰く

法律と道徳とは共に人類の行爲に關はる者にして其彼此の關係淺からず然りと雖も左の諸點に於ては彼此自ら異なり即ち(第一)法律に於ては唯人を其自由の意思を具するの上に於て而已觀ることを爲し道徳に於ては其意志を善を爲すに決するの上に就て觀ることを爲す(第二)法律は人を以て他人と共に社會を爲し居る者となして之を考へ道徳は人に思想行爲の法則を教へ人をして他人と共に社會を爲さる時にも其法を守り獨を慎ましむ(第三)法律は人の行爲の外部にあらはるゝ者にのみ關はる者道徳は人の内心の意志思想を治むるに缺べからざる者なり(第四)法律は人の意志を制するに當りて身外の拘束を以て其不規亦横を抑ふるを常とす然ども道徳の審處に於ては人の自意に爲したるに

非る行爲(即ち人に逼られ強られて爲たる行爲)は何の價値もあることなし云々

夫道德は是の如く法律と異なる者なれば其人爲に成れるに非ること明なり若斯く人爲にあらざる時は是則ち天爲なり天爲とは何ぞや天とは芥々たる天を謂ふに非ず或人は之を以て造化主宰の神明と爲し或人は之を以て天然自然と爲す此二の中に尙又多少の異說ありと雖も西洋學者の此論は大抵此二說に歸すべし卽ち道德は造物主の意志より出る者と事物の性或は人性に本く者と云ふの二者なる而已此二說は初は互に相容ざるが如くに見ゆれども其實は然らず俱に其歸趣を同うするなり道德の本源は此に說きたるが如き者なるが今是より其性質の如何を略說せんとす此點に於も亦種々の議論ありと雖も上に述たる如くに道德を以て天より出たる者と爲す所の人の論ずる所は大抵左の如し佛國有名の倫理學者フランク氏其道德論中に述て云く

道德の根本は至善と云ふ者是なり善あらざれは道德なし隨て亦功德と云ふ者あらず善は誠に道德の眞正の根基唯一の基礎たり此よりして吾人の義務と云ふ者生ず云々夫至全と其致を一にす人間の諸能力の相結んで爲んと企つる所の目的の中に善を以て最第

一となすなり善は誠に永遠不易の大道なり無上無等の法則なり吾人は特別の性情を賦與せられたる者にして其思想言行等は皆此善に由らさる可らず抑善といふ者は唯に吾人の生存の一法たる而已ならず又唯に彼此の比較上にあらはるゝ其完全を謂ふにも非ず是れ卽ち至全を指す者にして至全の體卽ち是善なり之を至善と云ふ吾人は其理性心情思想情欲を之に合せしめんと務めて怠らさるなり此善は是分析して他の思想に歸せしむ可き者に非ず是は吾人の理性に具はりたる大理にして無る可らさる者なり之を滅却せんには先吾人の理性を滅却せさる可らず此善此至善を根本として道德並に立つなり

此說誠に道得て甚だ善し是に異なる所の道德說は世人之を賤めて飲食論と爲して顧みず是を以て先此定解を以て眞正の道德を說き得たる者と爲して是より佛敎の道德の如何を見んとす

佛書を閱するに道と云ふ語、德と云ふ語甚だ多し卽彼の四十二章經に云く佛言吾何念念道吾何行行道吾何言言道吾念諦道不忽須臾也と斯の如く佛陀は恒に道を念ずるなり而て其道は是善なりと云ふ卽ち同經に云く佛言何者爲善惟行道善何者最大志與道合大と道は是の如き者なれど之を見ること難し佛又其理を說て云く

人懷愛欲不見道者譬如濁水以五彩投其中致力攪之衆人共臨水上無能觀其影者愛欲交錯心中爲濁故不見道水澄穢除清淨無垢即自見形云々

惡心垢盡乃知魂靈所從來生死所趣向諸佛國土道德所在耳

此に道といふ者は即ち是道德にして此二者異なる所なし此故に此に道と云ひ又道德と云ふなり

上に說たる所の支那西洋等の道德說と此に擧たる佛敎の道德說とは唯に此に引たる言語の上に就て而已見る時は格別の相違なきが如し即ち彼には善を以て道德の礎本と爲し永遠不變の天理と爲し此には行道を以て善と爲し志の道と合するを以て最大なる事と爲す然りと雖も細に尋ね究むる時は彼此の間に大なる逕庭あり是を以て先佛敎道德の性質を說かざるを得ず是其社會に及ぼせる影響を論ずるに當りて預め知り居らざる可らざるの事なればなり但し佛敎の道德善惡等の說は頗る曖昧にして繁雜なる者なれば一々之を詳說する事は此論文の能くする所にあらざれば只其大體のみを言ふ可し

先佛敎の道德は彼の永遠不變の天理を其本源となす者に非ず隨て亦其所謂善も彼の永遠不易の大道を謂ふに非ず又無上無等の法則を指すにも非ず唯彼と此とを比較して彼は善此は惡と謂ふ者にして全く世俗の言語たる而已彼の所謂至善の善とは其性質同じからず是に由て今此に其善の如何を詳說して其道德の性質を一目に瞭たらしむ可し

抑佛敎には眞俗の二諦を立て其道を示す先其俗諦(諦は眞理なり)は世俗の間に行はるゝ所の道を謂ふ者なり又之を世諦と名く次に其眞諦は佛菩薩の覺知する所なり又之を實諦と名く其虛妄ならざるの義にとれるなり彼の臣子に忠孝を勸め朋友に信義を勸め國家に治平を勸むるが如きは皆是俗諦に依るなり俗諦に於は是の如き事を以て善なる者と爲す然れども眞諦は之と異り全く善惡の境を超て本寂の妙理を明にす是を以て眞諦に於は是非雙泯して一性泯然たり今此に三四の例をあけて此二者を明にすべし先釋迦の父淨飯王の逝葬に當りて釋迦は其屍を七寶の棺に殮めて之を鄭重に葬むりしと云ふ即ち

淨飯王命終、殯以七寶棺、佛與難陀在前恭肅而立、阿難與羅睺羅在後、佛念當來兇暴不報父母深恩、躬自擎棺

と云が如し此に當來云々と言ふは後世に不孝の子の顯はれんことを念ひて孝行の模範を垂たる者なり是即ち終を送るに厚き者にして孔子の孝を教へしと其意異る所なし又波羅奈國有長者子共孝行天神感王行孝緣と云ふ一話に左の語あり

如是我聞、一時佛舍衛國に在て諸の比丘に告て云く人若梵天王を己の家の中に在しめんと欲せば能く父母に孝養を盡せよ然は梵天即ち家の中に在ん帝釋天をして己の家の中に在しめんと欲するも亦然す可し又一切の天神を己の家の中に在しめんと欲せば但父母を供養せよ當に知る可し一切の天神已に家の中に在り唯能く父母を供養せよ然は和尚已に家の中に在るなり云々又諸の賢聖及佛を供養せんと欲せんに若父母を供養せば諸の聖賢及び佛即ち其家の中に在ん諸の比丘の曰く如來世尊極て希有にましまし父母に恭敬を盡したまふと佛の

言く唯今日希有に父母に恭敬を盡すのみならず過去世に於も亦希有に父母に恭敬を盡したり

斯て釋迦は其過去世の孝行の始末を演說せりと云ふ誠に佛經中には孝行を重する語甚多し此事大小乘共に皆然り彼の棄老國緣篇の如きは殊に美談なり我國に昔ひ傳ふる所の蟻通(アリトホシヒメナ)、灰蠅の談の如きも皆佛教より出たる者なるが偏く人口に膾炙せる事なれば此に言ず唯棄老國緣篇の中より左の一事を畧し引く可し

佛作是言、恭敬宿老有大利益、未曾聞事而得聞解、名稱遠達、智者所敬云々

佛言過去有棄老國彼國土中有一大臣其性孝順不忍棄父乃深掘地作一密室置父於其中隨時孝養、時天神以種々難問試國王云々天神又復問言此大白象有幾斤兩君臣共議無能知者、亦募國內復不能知大臣問父、父言置象船上著大池中畫水齊船深淺幾許即以此船量石著中水沒齊畫則知斤兩

是の如く佛經の中に孝行の事を說くが故に彼の童子教是は近年迄小童

に教へ習はせし者なり)にも左の如く教へてあり云く

觀音、爲師孝寶冠戴彌陀勢至爲親孝頭戴父母骨寶瓶納白骨

父恩者高山須彌山尙下母德者深海滄溟海還淺

次に又釋迦は優塡王の爲に王法政論を演說せりと云ふ其經の中には王之過失、王之功德、王衰損門、王可愛法、及能起發王可愛之法等を細說す(鳥尾公の王法論は之に基けるなりと云)是即ち勸臣子以忠孝勸家國以和治者にして俱に俗諦に依るなり此外俗諦に於て倫理人道を敎ふるの模樣大抵是と同じ一々引證するに及はず是の如く人道を盡し倫理を全うする事を總て善と稱す是世間の所謂善なり之に反すれば即ち惡となる其惡となるも亦是世諦に依るなり又惡業の種類たる殆と無數にして一々に說く可らす彼師長を見て起ざる事尊長を見て頭を縮めて走り避る事、冬月に冷食を人に與ふる事等の如きも亦惡因となりて惡果を結ふと言は是頓て惡業なり即ち爲人癡躄從見師長不起中來爲人短項從見尊長縮頭走避中來爲人氣嗽從冬月與人冷食中來と云ふ者是なり彼貪瞋癡、殺盜婬

の如きは惡の大なる者五逆は惡中の大惡なりと云ふ五逆とは一は殺母、二は殺父、三は殺阿羅漢、四は破和合僧、五は出佛身血を謂ふ之を又五無間業と名く言无間者造此業已定生地獄无餘生間或受苦无間或无樂間苦故名无間也是等の種々の惡業によりて輪廻生死止むこと無し即ち中論に之を論して云ふ

貪瞋癡名曰三毒以此三毒因緣起三業三業因緣起三界是故有一切法

抑佛敎の所謂惡業は其類是の如く多しと雖も之を十惡に約して說くことあり善惡因果經に云く

佛告阿難如向所說種々衆苦皆由十惡業云々於中殺生之罪能令衆生墮於地獄畜生餓鬼云々

此十惡は則ち十善に對する者なり四十二章經にも是事を說て云ふ

佛言く衆生は十事を以て善と爲し亦十事を以て惡と爲す即ち殺、盜、婬、兩舌、惡罵、妄語、綺語、嫉、悲、癡

是等の諸事を惡となすも亦上に言し如く世俗諦に依る者と知る可し已

に四十二章經には衆生以十事爲惡と說てあり想ふに是にて佛敎の所謂善惡は既に明かなるへけれは今よりは佛者か何故に是等の事を善と爲し是等の事を惡と爲すやを尋ね究めんとす

佛陀の說によれは衆世界は皆迷境にして衆生の輪廻する所なり其中に善趣と惡趣とありて善業を造れる者は天道人間の如き天趣に生れ惡業を造れる者は地獄畜生の如き惡趣に墮つ是を總て輪廻と名く即ち經に曰く

能成福德者　是十善業道　二世五欲樂　即是善業報

又云く

地獄餓鬼畜生等種々衆苦皆是由十惡業

是に由て考ふるに此諸善は衆生に暫時の快樂を得せしむるに因て善と謂ひ此諸惡は衆生に種々の衆苦を與ふるに因て惡と謂ふなり究竟絕待の善に非す惡も亦然り父母に孝養を盡すは世間の善なり君主に忠を盡すも亦世間の善なり是事なけれは天下亂れて人々身を安する所あらす

是を以て佛陀も之を善と爲て人に勸む又唯是のみならす君臣父子互に相殺す時は輪廻の業益相增し來るに由て是惡業は制止せさる可らす是亦佛陀か世間の言說に循ひて善惡の區別を立し所以なり是を以て其所謂善惡は上に言る如く天理に本いて出たる者にあらす永遠不變の道理にもあらす唯方便の道なる而已大悟したる聖者は此等の善惡業の爲に輪廻の道に入ることなし(一休禪師の言行を見ても此理は會得せらる可し)即ち大般若經に說て云か如し

一切善非善法空寂淸潔句義是菩薩句義一切有記無記法有漏無漏法有爲無爲法世間出世間法空寂淸淨句義是菩薩句義所以者何以一切法自性空故云々佛言若得聞此甚深微妙淸淨法門深信受者一切障蓋皆不能染所謂惱煩障業障報障雖多積集而不能染雖造種々極重惡業而易消滅不墮惡趣云々

若有得聞如是四種般若理趣現等覺門信解受持讀誦修習雖造一切極重惡業而能超越一切惡趣疾證無上正等菩提云々又言如是之人假使殺害

三界所攝一切有情而不由斯墮於地獄傍生鬼界

此事實に然る可し經に見ゆる如く貪欲瞋恚愚癡是世間根本にして世間は虛妄の迷境たれは大悟者より之を觀る時は是實に皆無の境たり何の善惡か其間にある可ん上に引たる三毒因緣起三業云々の話は正に此義なり又仁王護國智度經に曰く

凡夫は六識麁なるか故に假名の青黃方圓等の無量の假色法を得聖人は六識淨きか故に實法の色香味觸一切の實色法を得夫衆生は世諦之名なり若くは有若くは無但衆生の憶念より生す是を世諦と名く世諦は假誑幻化にして有り又六道の衆生も幻化のみ婆羅門(バラモンティ)刹帝利(クシャトリヤ)(王種)毘舍(ヴァイシャ)(商農種)首陀(スドラ)(工匠)神我等の色心を名て幻諦となす

是の如くに一切を觀察するを眞諦と云ふ眞諦に於は上に說る如く善惡雙泯す是大悟の境なり佛敎の所謂善惡は方便にして眞實にあらす是を以て善の爲に之を爲し惡の爲に之を爲さすと云ふか如き事あらさるなり是其善惡は一定不變の大理にあらされはなり

諸佛敎の所謂善惡は其性質是の如き者なれは其所謂道德の意義も是に准して明かなる可し佛敎の道德は天理に遊ひて人道を全うするの事を謂ふ者にあらす反て世間の所謂天理に戻りて世間の所謂人道を棄ることを謂ふ者なり彼の世俗諦の善行の如きは佛敎の道德と成る者にあらす彼の四十二章經に佛言我何念念道云々と云が如きは世間の道を念するの義にあらず全く諦道を念する者なり諦道は眞實不妄の道にして世間の幻道に反對する者なり此眞實の道を覺道と名く即ち大悟の道なり菩提の道なり佛敎の道德若世間の人倫を全うするにあらば佛敎立つ可らず如何となれば人倫を全うするは在家の身に限る事なればなり出家焉そ五倫の道を盡すことを得ん釋迦は父に離れ妻を棄て子に別れて遠く山中に入て佛道を修し得たるに非ずや是既に人道を全うする者にあらざるなり釋迦死に臨みて遺言して云く

汝等比丘寂靜無爲の安樂を求んと欲は慣鬧を離れて獨處閑居す可し靜處の人は帝釋諸天共に之を敬重す是故に己衆他衆を捨て空閑に獨

處して苦の本を滅せんことを思ふ可し衆を樂ふ者は衆惱を受く早く遠離をなす可し

此に言る寂靜無爲の安樂は即ち佛果を指す者にして佛道の志す所は唯是一事にありとす唯世間の人恩愛の紲に繫かれて斷然と出家する能はさるなり既に出家する能はされば佛敎の道を行ふ事も亦得ざるに因て佛者は在家の人を非行道人と名け出家の人を道人と名く是の如く世人か恩愛の情にひかされて迷ひに迷ひて覺道に入る能はさるは佛陀か常に憐憫する所なり是を以て上に引たる如く佛は人愎愛欲不見道云々と宣おきぬ誠に愛着は捨かたき者と知らる彼刈萱の今道心が石童丸に對面する所の淨瑠璃の如きは善く其情をうつせる者なり佛陀の說によれば愛は誠の萬惡の根本にして貪欲是より生ず卽ち初は愛次は着次は染次は婬欲次は貪欲此貪欲か瞋恚愚癡と合して三毒となり遂に三界を起して一切法あらしむるは前に說るか如し

玆に再ひ佛敎の道德を考ふるに是は善惡によりて成る者にあらす只覺

知悟入によつて成る者なり大覺者は三界一切の有情を悉く殺すとも斯かために地獄に墮るの事なし是は上に引たる大般若經の文の上に明なり其故如何と云ふに三界は盡く虛妄の迷境にして實有にあらざる者なれは其中の衆生も亦幻化物のみなるに因て之を殺すも罪なきなり幻化物は猶空花陽炎の如し空花陽炎は之を取るも盜むに非ず是幻化にして其物あらざればなり大悟者が三界の衆生を見るも亦然り只世俗迷ひて妄りに三界を作り迷ひて妄りに惡業を造り迷ひて妄りに惡趣に輪廻するなり世人の所謂天理人道は大覺者より之を見ば皆是虛妄の理なるのみ佛敎の道德は超然として善惡の上に立つなり

偖佛敎道德の性質は大抵是の如し此を以て上に說たる彼道德說に較ふるに其性質全く異なり即ち彼は世間の道德此は出世間の道德たり彼は天を以て其本源とし此は佛陀を以て其目的となす夫天は則ち造化なり自然なり佛陀は則ち我なり物なり讀者詳に其區別を考へられよ

是の如く佛敎道德の性質を說きたれば是よりは其世間に及ぼせる影響

を見んとす先佛教の世を感化せし事は甚だ大にして天下に隠なし隨て又其道德の世に影響を及ぼせし事の小ならざる事明かなり然らば此出世間の道が世間を感化せし其樣如何想ふに佛教の世間を感化せしは只其世俗諦の道に由る而已なるか如し佛教は微妙難解之道なるが上に人智未開の邦國にのみ多く傳はりたれば終に其眞面目たる眞諦の實義を世間に知しむることを得ざりき蓋佛教の眞諦は人知未開の邦には教ふるも理會する者少く人知の開發せる國には傳ふるも信受する者なかるべきに因て到底世に益なき者ならんと思はる佛教既に此點に於て其目的を達し得さりしに因て終に其眞面目を失ひて一箇の大偶像教と化し來れり但し天下の事は其故なくして偶然に起ることあらざれば佛教が是の如く一變し來りしも亦其理ある者あらん是他ならす即ち其眞面目たる佛道が世間の人情に反するの致す所なり宋丞相無盡居士護法論(佛法を辯護する論なり)に說て云く

夫世之所悅者紛華適意之事釋之所習者簡靜息心之法是其所以相違於

世也諸有智者當察其理之所勝道之所在

此言未た盡さゝる所あり余は言ん世人の慮る所は飲食男女田園貨殖の事希ふ所は長生久視永遠存在の快樂なり釋氏の教る所は斷愛離欲遁世出家の事勸むる所は生滅永盡寂滅爲樂の境界なり是其世と相違ふ所にして其終に目的を達し得ざりしは全く之が爲なり世間の人に教ふるに出世間の道を以てす其通爭て行はれんや其道若し善く行はれ來りたらんには世間復是の如く相續せさる可し其行はれざりしは幸と言んか不幸と言んか余知さるなり或人は謂ふ釋迦は當時の惡風俗を革めんと欲して其道を立て四姓の區別を破り男女の關係を正せりと此言蓋釋迦の本意を言得たる者にあらす釋迦は初より出世間の道に志せり何そ世事の改良を目的とせん天下の惡弊を除くには王者の地位に立つこそ善けれ彼の阿輸迦王の大事業を見すや何ぞ出世間の僧となりて世間の改良をはかるか如き迂遠の事ある可んや且又釋迦もし世間の改良を目的としたらんには其失敗殊に大なる有ん而已

偖佛教は其初より眞實の目的を達する能はずしてありしか世人の好む所に循ひて終に偶像教と化し誦名念佛咒文讀誦等の事を專らに敎へて未來の欲樂を願はしむるに至る彼の造像功德經、珠數功德經の如きは後人を誤れる尤甚き者なり造像功德經に云く

佛言く若浄信の善男子善女人佛の無量無邊の功德を觀諦念思惟して深く信樂を生し諸の相好に依て佛像を造らは功德廣大無量無邊にして稱て數ふ可らず若人ありて衆雜綵を以て繒飾を爲り或は復金銀銅鐵鉛錫等の物を鎔して鑄又は栴檀香等に彫刻し又は眞珠螺貝を以て錦繡に織成し丹土白灰泥木を以て其力分に隨ひて佛像を作らば極小にして一指の大の如くなるも見る者をして是尊容を知しむるに於は其人の福報大なり云々

又珠數功德經に云ふ

文殊師利佛の聽(ユル)計を得て宣て云く若善男子善女人諸の陀羅尼及佛名を誦持せんとする者並に自ら利し他を利して速に諸法を成て驗を得

んとする者は其珠數を是の如くに作りて受持す可し其珠體は種々にして同からず鐵を以て珠數を爲る者は誦し捻(ツマ)ぐること一徧にして福を得ること五倍なり赤銅を以て珠數を爲る者は誦し掐ること一徧にして十倍の福を得眞珠珊瑚等の寶を以て珠數を爲る者は誦し掐ること一徧にして百倍の福を得云云若諸佛の淨土に生れんと願ふ者は法に依て此珠を受持す可し云々

是の如く佛道は偶像教となり因果應報と未來の禍福を說て人を導きしが故に至極當時の人情に適ひて到る處に於て夥多の信者を得たりしが其眞面目は只二三の知識の之を知(シ)る而已尋常の信者は只有難しとの思よりして之を信奉せしなり此道の始て我國に渡れる時には百濟王左の如く之を讃歎して我に聽しめたり

此道は信ずる者をして無量無邊の福德果報を得さしめ又無上の菩提を得さしむ此佛法を信ずる時は願ふ所の事皆心のまゝに獲らる

是を以て蘇我氏を始として衆多の人之に歸依して現當二世の福德を祈

りしか今日の世に至るまて一般に人の信する所は佛教を以て是の如き利益を與ふる者と爲にありて其眞面目を知る者は甚た稀なり既に是の如くなるか故に佛教は到る處に於て其道德を人に教ふるを得す只世俗諦上の善惡を以て佛教道德の教となして之を講述し他教に主張する所の天理人道を取り來りて其教を助け到る處に於て混淆宗教を作り出して衆庶の歸依を得たり是を以て余は謂ふ天下諸國に莫大なる勢力を及ぼせし者は釋迦氏の佛教に非す佛教より變し來りし許多の混淆教なりと

彼地獄極樂の說をなして無學質直の人を導きし如きは佛教の方便說に由る者なれは之を以て佛教道德の力に由る者と爲は其當を失へる者なり僧徒は人の死るあれは其人の善惡を問す直に之に戒名を與へて釋氏と爲し追善の力を以て其死者を助く是一般の風なり又中には念佛誦名等の力を借て罪業を消滅して極樂往生を得ると云ふ者もあり是の如くなるか故に佛教信者の中には眞實に其罪を悔て其行を改めたる者は絕

て無くして見ること稀なり彼老婆等か打つれたちて寺院に參るを見るに其罪を懺悔する事はなくして只佛力に依て極樂往生せんと求むるなり即ち其老婆等は一口南無佛と唱ふるかと見れは直に互に媳の惡口をなす是其常なり彼川柳に

六阿彌陀嫁の噂の捨どころ

とあるが如し又媳等の寺參も是と同うして其姑の惡口をなすを常とす然りと雖も未來の禍福を說か故に人をして惡を棄て善に就しむる事絕てなきに非ず然と只未來の欲樂を希ふの利欲心よりして惡をなすを止しむる而已終に心の底より罪を悔しむるに至らす是佛教には永遠不變の大理なる善を認めす教へさるに由る是を以て又其永遠不變の善に反對する所の惡といふ者あることなし是故に佛徒は善は善なるか故に行ふへく惡は惡なるか故に行ふへからすといふ事を知らす佛教か世間の道德を進むるに力なきは是にて明なり否佛教は世間の道德を以て虛妄となす者なり

余想ふに古來佛教を信せし者億萬なるへしと雖も其中に佛教の如何なる者なるかを問れて之に明かなる答を爲すを得たる者は稀なる可し多くは只佛は有難しと答ふるを得たる而已ならん無學の信者實に憐む可し悟道といふなる佛道を信して反て迷に陷ること哀しけれ彼の情死して一遂托生の樂を得んと思ふか如きも此類なり佛教は是の如き者なるか故に僧徒の中にも眞に之を解する者甚た少く又其道德を持つ者稀にして多くは情を縱にして淫佚を極む想ふに佛教か斯く今日まて持ち來りしは國王大臣等の力に由るならん歟經文にも我法付囑國王大臣守護之と見ゆ唐の太宗の勅旨に

往者如來滅度之時以末代澆浮付囑國王大臣護持佛法然僧尼出家戒行須備若縱情淫佚觸途煩惱關涉人間動違經律既失如來玄妙之旨又虧國王受付之義

又我國の大寶令にも僧尼律の設あり其中に云ふ

凡僧尼飲酒食肉服五辛者三十日苦使

其外天文を觀て災祥を說く者、兵書を習ふ者、吉凶をトふ者妄りに罪福を說く者等は皆懲罰を蒙りたり又北條泰時の執權たりし時に成りたる貞永式目(御成敗式目)にも最初に斯く書してあり

一　可修理神社專祭祀事

右神者依人之敬增威云々

一　可修造寺塔勤行佛事等事

右寺社雖異崇敬惟同仍修造之功恒例之勤宜准先條莫招後勘但恣貪寺用於不勤其役之輩者早可令改易彼職矣

今日に於も尙佛教は官の助力に由て立つ所あり佛教は必竟自ら立つ能はざる者なるか

今我國の上に就て言んに日用の言語一般の風俗よりして各種の文學一として佛意の混ぜざる者あらざれば我國が佛教に浸染せること徧しと謂ふ可し然りと雖も其佛法は眞物にあらずして許他の混淆教たること上に言る如くなれば佛教は終に此世間に其目的を達し得ざる者なるに

やと疑はる聞く所に依ば村上専精を始として許多の僧俗今佛教を改革せんと志し居る由彼徒若し角をなほさんとして牛を殺すことなくば幸なり

偖是の如く說き來りて觀ば佛教道德の世に行はれざりしこと知べし故に我は言ふ

佛教の眞實の道德は古來天下に行はれしこと無し世間に行はるゝ佛教道德は一種の混淆物にして純一の者にあらず釋氏の本旨にあらず又唯に道德のみならず佛教も亦已に混淆物たり釋迦氏再び出るに非れば之を其眞面目に復すること難し嗚呼出世間の道今は已に世間の道となれり是歎ず可きことなる乎否世間の道となりしに因て今日まで行はれ來しなれば反て喜ぶ可きことなるも知べからず

或人云ふ佛教は直接ならざるも間接に世を益せし事多し先彼學問の如きも戰國に在ては多く僧徒の手に存して斯文尙未だ亡びず又兒童教育の事も多くは僧徒之をなし來りし是寺子屋の名ある所以なり且又古昔

阿輸迦王は佛を信じて之を國教と爲し大に治術を改良して刑殺之法を除き國中に病院の如き者を建て施藥館を設け道路の傍に樹を植え井を掘しめたり是皆佛教の益を世に及ぼせる者なり又我國に於ても僧徒に して處々に橋を架し或は山を開きて國家に力を致せし者あり佛教何ぞ世に益す所なからんや

余之に應へて言ふ此事誠に有之然りと雖も是等は皆佛教と離れ難き關係ある者にあらず佛教に限らず他教の僧徒の中にも是に類する事を爲し者多し是は只其僧徒の心より出たる者にして佛教の爲しめたる者には非ず且又佛教は世を棄ることを教ふるなるに彼等は世事に力を致したるなれば寧ろ佛教の本意に背ける者と評すべきか假令然いふ可らざるも是は佛教の功たらざるなり』云々

佛教の道德は大凡斯の如し善と云ひ惡と云ふは只是れ軀殼より割り出ち來れる語のみ佛教が道德の建立に功

鮮なかりしは畢竟これが爲のみ、後世の佛徒中乘大乘を敷衍し、圓教頓教を鋪張し來りたれば、殊に北方の佛教にありては、意味非常に深奥なる如き觀あれども、本初の佛教は阿輸迦王の時代に一時旺盛を極めたれども、忽ち民間には退墮の徴をあらはし始めたり、アレキサンデル大王の驍將セリウカスがシリアの王となりて後印度の王サンドラコッタの許へ派遣せし學者メガステヂスが數年の滯天後還りて希臘に著はせし書中の言に依れば、佛教は早くも既に迷信教に腐敗してをりしと見ゆ、實に是れ西洋紀元前三百年の事なりき、メガステヂスは婆羅門輩（彼は之をブラホマヂスと名く）をば哲學者として多少敬重したれども、佛教徒（彼は之をサルマヂス即ち沙門と名く）をば巫醫の徒と記載したるを見る、然るに斯く巫醫の眞似をなすことは釋迦牟尼が禁止したる所なるは皆人の知る所なるに非ずや、遺教經に曰く『草木を斬伐せざれ、土を墾き地を堀らざれ、湯藥を合和せざれ、吉凶を占相せざれ、星宿を仰視し盈虛を推步せざれ、呪術仙藥せざれ』と、若し此等の句果して釋迦の精神なりとせば、佛教僧徒が夙に墮落したりしことは明白なる事實ならざらんや、而して是多くは憎罪の念の强からざるに起因すとや言はまし、既に出家沙門斯の如くなりければ、信徒が滔々相率ゐて虛信僞善に流れ、ソラ念佛に奔りしも偶然にあらず、寧ろ自然の順序なる而已、兎に角佛教は其信徒をして蛇蝎の如くに罪を惡ましむる能はざりし也、是れ开が人間社會の風化に與かりて割合に功果

少なかりし所以なる歟、

要するに、佛教は倫理を説く能はず、如何となれば人倫の理を全うするは世間の常道を維持する者にして、正に寂滅爲樂の主義と背反し、正覺涅槃の妙理に悖戻するが故なり、

基督教は全く之に反す、耶蘇教は聖潔(holiness)を以て精神とす、聖潔とは罪を罪として絶對的に之を懼れ惡むの謂なり、善を善として絶對的に之を貴び愛するの謂なり、基督教は此世を以て佛教の如く無明(迷想)の所造となさず、却つて之を造物主(天帝)の創造に係る者となす、隨つて又此世を以て佛教の如く虛妄となさず、却つて之を正當の開發と爲す、此の如き宗教にして始めて倫理を説くを

得べく、斯の如き法門にして始めて道德を語るを得べけん、如何となれば基督教は此世の秩序を滅絶せんとは試みず、却つて此世の秩序を回復せんと志ざせば也、

語に曰く『其結ぶ果を見て樹の善惡を知れ』と、基督教は泰西の文明開化を來せり、佛教は泰東の文明開化を來せり、一は進取的にして、一は退守的なり、一は進歩的にして、一は退歩的なり、而して此等兩結果は自然中の最も自然なる者とす、如何となれば世道を滅盡せんと志す宗教焉んぞ進歩的なるを得んや、世道を高尚にせんと計る宗教焉んぞ退歩的なるを得んや、

反對論者往々詭辯を弄して曰く、西洋の文明は基督教の來せし者にあらず、基督教あるにも拘はらずして來りし

者なりと、斯の如く論ずるは猶陽春駘蕩の氣候裏に百花の爛漫たるを見ながら、强辯して百花の爛漫たるは百花其物の性なり、駘蕩の氣豈能く之をして咲かしめ得んやと云ふが如し、其孰れか是、孰れか非、必ずしも識者を待つて後知るべきに非ず、之を譬ふるに佛教は萬物を肅殺する金氣の如し、此の肅殺氣中に在りてや、出世間の道は昌へんも世間の文明は枯死せん而已、佛教の語を借りて之を言んに、因果應報の理は決して爭ふ可らず、麥を蒔けば麥を穫り、燕麥を蒔けば燕麥を穫る、自然の理然れば也、佛教が偶像教として、一見成功したる如きは腐敗の結果なれば、決して眞の成功には非ず、

余輩が屢々論及せる如く、『基督教は終極の宗教なり』てふルナンの語は吾が意を得たる者なる哉、宗教としてや基督教は尤も其體を得たる者とす、然し乍ら流石の基督教も此の節の如き不信仰なる冷氣中には萎靡せざるを得ず、此基督教にして若し尙奮はずんば、宗教てふ者は悉く舊廢して、基督教は蓋し宗教の終極(最後)なる者とならん歟、少なくとも基督教は諸宗教の殿たる者と謂ふべし、但し是は宗教の將來論にして、本論の趣旨に非ざれば、他日を待つ事とし、今は姑く茲に筆を擱かんとす、

世界三聖論

大尾

明治三十六年四月二十一日印刷
明治三十六年四月二十五日發行

定價金四拾錢

著作者　高橋五郎　東京市芝區三島町十二番地
發行者　前川亦三郎　東京市日本橋區箔屋町十六番地
發賣者　栗本長質　東京市日本橋區錢砲町十三番地
印刷者　佐久間衡治　東京市京橋區四紺屋町廿六七番地
印刷所　株式會社秀英舍　東京市京橋區四紺屋町廿六七番地

不許複製

發行所　東京市日本橋區箔屋町　前川文榮閣

宮中御歌所寄人　中邨秋香先生新作
華族女學校講師　小野鵞堂先生淨書

女子消息 文の手ほどき

新編 手紙

（男子用）

木版上半紙
摺新意匠無類の美本
男女各一冊
定價四拾錢
郵税四錢

本書は中邨秋香先生の新作にして書簡文獨習者の爲に通俗平易なる實用の文題百餘種を總振かな付にせられたるは他に其の比を見ざる處特に小野鵞堂先生が大字に書かれたれば習字の手本として此上もなき良書なり

文榮閣新刊圖書

宮中御歌所寄人　中邨秋香先生著

文鑑 千草の錦

紙質特選印刷鮮明紙數三百頁餘和裝頗る美本
定價金參拾五錢
郵税六錢

開く鶯の雛を飼育する、善き親鳥を擇ぶにあざられば美聲を發する能はずと、文章に於けるも亦此の如きか、人を感かすべき名文を作らんと欲せば、先づ名家の傑作を擇みて鑑とせざるべからず、此書は中邨秋香先生が三十餘年間讀書の餘暇、古學復興以來諸名家の文中、金玉の響あるものを抄錄せられしが、積んで數十卷と成りしを、中に就て男女學生の摸範となるべき美文、記事、紀行、論說、消息、物語躰等無慮數百編を撰出せられ、之に加ふるに當代諸名流の文を以てせられ、特に上段には、要語數千を載せ、作習の摸範と應用とに供せられしは、他に其比を見ざるなり、抑も中古以來漢語の輸入及近世洋語の濫入と共に不知不識の中に、國語の法則を紊り、語法語格を誤れる者少なからず本書は其文章に於る右に述ぶるが如く、金玉の萃のみならず、其語格語法亦極めて嚴正なるものなれば、常に之を座右にして能く之に熟せんには、數千卷を繙かずして、あらゆる天下の名文章を會得し、筆を把るに臨みて千萬言の長篇大作も、忽ちにして一氣呵成すること、恰も神有りて我を助くるものゝ如く、自ら其筆の自在なるを怪しむ程に至るべきなり、

書簡文の法式男女に別ちて大成せるものは、古來未だ曾て有らず、蓋し書簡に法式のなからざるべからざるは、尚人に禮儀の缺くべからざるが如く、苟も人に禮儀なく、書簡に法式なからんか、其人如何に貴しと雖、又いかに富めりと雖、一日も交際場裡に立つこと能はざるべし、御歌所寄人中邨秋香先生深くこゝに感ぜられ、即ち男女に就きて、各書簡文法式の撰著ありて之を世に公にせらる、

新編 書簡文法式

（本書目次）總論●書簡●書簡箋●封筒●卷狀●結文●折狀●包狀●廻狀●書簡文につきての心得●文體●書體●切字●墨色●印章●位置●年月日●擡頭、平出、闕字●自他名稱●冒頭、收結●殿、樣、君●脇附●端書●追書●顚倒字●送り假字●假字遣●崇敬詞●書簡語、一種の副詞●誤用●讀法●狀箱、名宛小札●口上書●郵便はがき◎附錄●目錄以下認方法式●目錄●詠草●短冊●色紙●懷紙◎崇敬詞、書簡語、一種の副詞、誤用、讀法等の如きは常人の心附かざる點少なからず本書の價値はこれのみにても充分に存する也

總クロス金字入
舶來紙上質印刷
無類の美本
定價金五拾錢
郵稅金六錢

文榮閣新刊圖書

新編 女子書簡文法式

（本書目次）總論●書簡●書簡箋●封筒●卷狀●結文●散らし文●包狀●廻狀●書簡文に附きての心得●文體●書體●切字●墨色●印章●位置●年、月、日●自他名稱●冒頭收結●樣、君、殿●脇附●返す〳〵、追て書●顚倒字●送り假字●假字使●崇敬詞●書簡語、副詞●誤用●讀法●狀箱●口上書●郵便はがき●附錄●詠草●短冊●色紙●懷紙●女子は男子と自ら差別ありて特に散らし文は小野鵞堂先生の書に係るものを挿入せり

總クロス金文字
舶來紙上質印刷
無類の美本
定價金六拾錢
郵稅金六錢

此法式は元來書體に本づくものなりと雖、封建制度の代に於ける尊卑上下に就きて種々の段階を別つが如き煩を避け、今日の現狀に依り舊新を對照して以て時の宜に從ひ、適當の式を設けられしものなり、故に人間處世には一日も缺くべからざるは勿論、苟も筆を書簡に把る人は、瞬時も座右を放つべからざる要書なりといふべし

宮中御歌所寄人　中邨秋香先生著
華族女學校講師　小野鵞堂先生書

新編書簡文例

新編 女子書簡文例

（男子用）

書簡の文體は直に其人の品位如何を想像するに足るべく、又其人の智識の多少を推測し得べきものなり、故に書簡の文體の苟もすべがらざるは今更に喋々を要せず、本書の文例は現代の文豪中邨秋香先生の腦漿より迸出せしものなれば、一言一句津々たる趣味あり、繁に流れず簡に失せず、擬古に陷らず、流俗に同せずして眞に今日書簡文の好摸範たり、加ふるに書は筆硯界の巨擘小野鵞堂先生の手腕に成りしものなれば又習字の龜鑑として上乘の書なり、殊に上欄に類語數千句を掲げ書簡文を作習せんと欲する人をして自由自在に意を達せしむるの便に供せられたるものなれば、新編書簡文法式と相待て斯道の完璧と稱すべきものなり、

木版半紙摺
高尚優美本
男女各壹冊
定價金六拾錢
郵税六錢

久津見蕨村先生新著

家庭教育 子供のしつけ

洋裝清酒艶麗
定價金廿五錢
郵税金四錢

家庭教育不完全の聲漸く喧し世上是が適切なる參考書を要求すること頗る急にして其之を缺けるが爲め子女教育上大なる不便を感じつゝあるは識者の常に遺憾となせる處なり

本書は是が缺點を補はん爲め著者が該博の識と多年の實驗に依り幼稚時代、兒童時代、少年時代、青年時代の四段階に至る家庭教育の仕方を言文一致體にて十三章百六十餘條に說き示されたる者なれば婦女子にても容易に理解せられ直に實際に試むることを得べきやう記述せられたる近來稀に見るの好著なり

綠川金之助君新著

新式實驗 商業簿記

近刊

著者ハ商業界ニ在リ實務ニ鞅掌スル「茲ニ十數年其自ラ經歷セシ事實ト事務員ヲ養成シタル實驗トニ依リ從來有リフレタル簿記書ニ就テ感スル所アリ業務ノ餘暇ヲ偷ンテ著述シタル者ニシテ彼ノ新ニ學校ヲ出テ趙括之兵ヲ談スル者ト同日ノ者ニアラサル也

本書ノ特色

起源沿革等學理及實務ニ要ナキモノヲ說カス又初メニ學理ヲ喋々シ記入ニ至リ冷然顧ミサル如キヲ爲サス四編ニ分チ第一編ニ原則術語ヨリ總テ帳簿ニ關スル「ハ法律ト商習慣トニ因リ諄々說明シ次ニ六個ノ例題ヲ掲ケ以テ大中小ノ商店ニ向テ適當ナル帳簿ノ組織ヲ示シ第二編ハ解式トシテ全部ノ帳簿及表類ヲ掲ケ第三編ハ例題ト解式トノ關係ヨリ記入ノ法ヲ示シ引證スルニ學理ト法律習慣等ヲ以テシ煦々トシテ倦ム「ナシ第四編ニハ株式會社合名合資會社共算組合等ノ帳簿組織ヲ說ケリ

商業上起ルベキ所ノ取引ハ細大說キ盡クシテ又餘蘊ナシ殊ニ勘定ハ初起ヨリ終末ニ至ルマテ何故ニ斯ク記入スルノ餘儀ナキカヲ論シ秩序ヲ立テ、決算ノ報告誤記ノ發見法等ヲ示ス殊ニ商業ノ習慣ニ至リテハ極メテ精細ニ入リ帳簿ノ如キ前人未說ノ者ヲ掲ケタリ一言之ヲ掩ヘハ猝キ所ニ手ノ屆キタル說キ方ナリ

74
20

013691-000-7

74-259

世界三聖論

高橋　五郎／著

M36

ABA-0162